



エデン・リベレーション

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

revelation :

- (1) 暴露、すっぱ抜き
- (2) 啓示、天啓
- (3) 黙示録

Contents

- 1 奇跡の発端
- 2 生贄の後景
- 3 解脱のマニュアル
- 4 煩悩の回路
- 5 聖約の異境
- 6 異端の決裁
- 7 真理のアナグラム

★タップすれば各章へジャンプします

1
奇跡の発端

いくらカリフォルニアとはいえ、五月では、プール
の水はまだ冷たい。水面に爪先をつけた美幸は、思わ
ず、足の親指をぎゅっと折り曲げた。

その冷たさをこらえ、プールのへりから体をすべらせ、水に入っていく。

細い足首。すらりと張りつめたふくらはぎ。やわらかな曲線を描く両腿。そして、漆黒の茂みにつづく、繊細工のように白く、均整のとれたボディ。そこには、水着はもちろん、その美しさを被うものはいっさい着けていない。

プールの底に足がつくと、水面はちょうど乳輪の下

あたりまでくる。ふたつの胸のふくらみが、浮力を受け、ゆたゆたと揺れた。水の冷たさに、乳首が少し硬くなるのもわかる。

美幸は、そのなんとも言えない幸福感の中で、大きく深呼吸をし、ゆっくりと泳ぎはじめた。

（……この体は、あたしの信仰の証し。ほんの少し医学の力を借りたにしても、あたしの修練に応え、主がお与えくださったもの。あの人の……いえ、教主様のお

お疲れをお癒しするため、主がお求めになった「私たち」……。

その「かたち」を完成させることが、今の美幸の「使命」だった。だから、朝の水泳は欠かせない日課なのだ。

新緑の森の樹々を映す円形プールの水面に、泳ぐ美幸の長い髪が扇形に広がり、その先から幾重にも立つたさざ波が、さらに大きな扇を形作った。

ここは、エデントウルース・オブ・エデンの真理教団アメリカ西海岸本部のコロニー。大富豪である信者の一人が、別荘を無償で寄進してくれたものだ。

多くのアメリカ人信者たちが、日々「修練」を積む、その巨大な敷地の、いちばん奥にあるプールつきコテージが、アメリカ滞在中の教主夫妻の居室にあてられている。

「ミストレスみゆき。教主様が出演されるTVプログ

ラムが始まりましたわ」

コテージのテラスに出てきたジャクリーヌが、美幸を呼んだ。

（あの人だったら、また、あたしのことをミストレスなんて……）

美幸は、苦笑しながら、ジャクリーヌに答えた。

「ええ。いま行くわ、ジャツキー」

ジャクリーヌは、西海岸本部が、美幸の世話係とし

てつけてくれた教団専従の信者だ。専従になる前は、カリフォルニア州立大学で日本文学を教えていたというインテリで、完璧な日本語を話す。英語があまり得意でない美幸にとって、ありがたい存在だった。

プールからあがった美幸は、そこに置いてあった真っ白なバスローブをはおり、テラスからコテージに入った。

すでにテレビに見入っていたジャクリーヌは、美幸

に気づくと、すぐソファを立ち、タオルを差し出した。

「どうぞ、ミストレス」

「ジャツキー、何度も言うけれどミストレスなんて言
いはよくないわ。教義に反するもの。導師マスターになれる
のは『真のアダム』だけ。女は、二級の人類なのです
からね」

「はい。でも、いつも教主様のおそばにいらっしやる
ミストレスは、あたしたちのあこがれですもの」

「ほら、また」

「……では、何とお呼びすればよろしいのですか？」
「みゆき、でいいのよ」

美幸は、そのタオルを受け取ると、長い髪を拭きながら、ソファに座って、テレビ画面に目をやった。

そこには一人の東洋人の男が映っていた。皺ひとつない肌と細面の整った顔立ちは、男がまだ若いことを示していたが、その毅然とした態度と落ちついた物腰

が、年に似合わぬ威厳を感じさせている。男の両側の席には、三人の男と一人の女が座っている。左端の男は、どうやら司会者のようだった。

「あの人たち、誰なの？」

「なんでも、プロテスタントの牧師と、宗教学者と、社会学者だそうですわ。でも、どうせ食わせものです。インテリジェンスのかけらもないんですもの。ほら、最初からあんなに敵意むき出しで、教主様を中傷して」

ジャクリー又は露骨に顔をしかめてそう言った後、テレビの討論の内容を美幸に通訳した。

この討論は、もともと、サクラメントのケーブル局が企画したものだ。ところが、それを聞きつけたCNが企画を買い、全米へ中継されることになったのだ。そうだ。それほど、この日本生まれの教団の存在が、米国にとって、看過できなくなっている証拠だった。

以前は秘密にされていた教義が、外部に公表されて

以来、エデンの真理教団の信者は、日本でもアメリカでも確実に増えつづけていた。ことにアメリカでは、急成長と言ってよかった。古い宗教的信念に固執するファンダメンタリストからも、フェミニストやエコロジストを中心とするリベラルからも、また、興味本位のマスコミからも、あれだけ擲^や揄^ゆされ、攻撃されていくにもかかわらずだ。

「それにしても、さすがに教主様は立派ですわ。あん

な連中に対してさえ、冷静に、穏やかに真理を説いていらっしやる」

「……ええ」

美幸は、画面にクロローズアップされた男の顔に、うつとりと見入った。

その自信に満ちた端正な表情の前では、そして、美しい英語で語られる愛の言葉の前では、他の論者たちは、みんな俗物でしかなかった。

「あまりにもエキセントリックな教義に過ぎる」と言う宗教学者の方が、ずっとエキセントリックに見えた。

「世紀末の粗野なファッションでしかありません」と断罪する女性社会学者の方が、ずっと粗野だった。

「こないかがわしい人物は、メシアどころか、悪魔の使いに他ならない」と攻撃する牧師の方が、ずっといかがわしく、野蛮だった。

少なくとも、美幸にはそう見えた。

（……ああ、教主様。あなたのような方に妻として仕える美幸は、本当に幸せな女です……）

美幸は、体の奥から沸き上がる至福感に思わず目を閉じ、深く息を吸った。それは、今テレビの中で愛を語る、まさにその男に、夜ごと抱かれる時の、あのエクスタシーと同じものだった。

「みゆき様、残念ですがそろそろお時間です。ドクタ―とのアPOINTは十時ですから、用意をなさらなけ

れば」

「え？　ええ、そうね」

ジャクリーヌに声をかけられ、美幸は、やっと我に帰った。

「何を持って行けばいいのかしら？」

「いえ、入院に必要なものは、すでに運ばせてあります。シャワーを浴びてらしてください」

テレビの画面を、名残惜しそうに見ながらソファを

立った美幸に、ジャクリーヌは、そう促した。

バスルームに入った美幸は、ローブを脱ぎ、降り注ぐ湯の中で、その美しい体を丹念に洗った。そして、洗い終わった後、水滴をしたたらせる股間の茂みに目をやった。

そこには、すでに消え入りそうなほど小さくなっただけだったが、かつての痕跡が残っていた。今度の入院は、その痕跡を消し去り、新たな女としての証しをつくる

ためのものだった。

(いよいよね……)

美幸は思った。その思いには、後悔も、感傷すらもなかった。

(これでやっと、あたしの人生をねじ曲げつづけてきた『呪われた肉体』と別れられるんだわ)

その喜びだけが、今の美幸の感慨だった。

バスルームを出ると、ジャクリーヌがシヨーツやス

リップなど真新しい下着を用意してくれていた。体を拭いたあと、美幸はそれらの下着を身につけた。ジャクリーヌは傍らに立ち、ブラジャーのホックをとめてくれたりした。

スリップを着終わり、顔を上げた時、美幸は、ジャクリーヌがなぜか浮かない顔をしているのに気づいた。

「……どうしたの？」

美幸がきくと、ジャクリー又は、ちよつと恥じらいながら答えた。

「え、いえ……。こうしてみゆき様を見てみると、あたし、なんだか悲しくなってしまうんです」

「あら、どうして？」

「みゆき様は、本当にお美しいから。それにくらべて、あたしなんて……」

「そんな……。ジャツキーだって、とても美人よ」

「慰めは、およしになってください。六フィート半もある女を、ふつう、美人とは言いませんもの」

「そんなことなくってよ。ジャツキーは、とても女らしいわ」

一六三センチの美幸は、一九五センチのジャクリー又を見上げて言った。

「いえ、みゆき様の腕や脚は、ほんとうに細くてきれいですわ。まるで、ハイティーンの少女のよう。それ

にくらべて、あたしなんて、骨は太いし、いくら努力しても筋肉はこれ以上落ちません。ハイスクール時代から、フットボールなんかやっていたから。いくら真理に目覚めてなかったとはいえ、なんであんな馬鹿なことをしてたのか……。もう、取り返しがつきません……」

ジャクリーヌは、言いながら、涙ぐんでいた。皮肉なことには、その仕草だけは、たしかに、とても女らし

かった。

「ジャツキー……」

美幸は、両手を差し出し、ジャクリーヌを抱きしめた。

長身のジャクリーヌは、ひざまづき、スリップ姿の美幸の胸に顔を埋めた。

「すべては主の与えたもうた試練です。それを乗り越えるのは、信仰の力しかないのよ、ジャツキー。なに

よりも大事なものは信じること。信ずれば、やがてその力が肉体をも変えるの」

「四十近いあたしには、もう、無理ですわ」

ジャクリー又は、今や、美幸の胸で泣きじやくって
いた。

女性ホルモンの多用による一時的な情緒の乱れには
ちがいない。が、彼女の悲しみは本心だった。

「ジャツキー、泣かないで。あたしだって……」

美幸は、ジャクリーヌの髪をやさしく撫でながら言った。

「四年前までは、今からは想像もつかない姿をしていたのよ。俗信に惑わされていたから。でも、この四年間、信仰しつづけることで、本当の自分を解放して、変わったの。心も、体も」

「あたしにも……できるかしら？」

泣きながら、ジャクリーヌは言った。

「ええ、きつとできるわ。そう。あたしの話をしてあげる。入院中、ずつとつきそってくれるんでしょ。これまで誰にも話さなかったけれど、あなたに話してあげる。あたしの身に起こった奇跡の一部始終を……」

……。

「おい、印刷に電話して、輪転機を止めさせろ。差し替えだ」

デスクの伊神は、深夜の編集室全体に響きわたるよ
うな大声で怒鳴った。

世間はクリスマスイブでひっそりしているというの
に、ここ、写真週刊誌「リベレーション」の編集部は、
今年最後の締切ぎりぎりにとびこんだ大スクープに、
いつきに活気づいた。

「いけるでしょ？」

伊神の前に、泥まみれのダウンジャケットを着て立

っていた荒井幸一は、どこか得意げに言った。

「ああ。これだけはつきり桐沢の顔が写ってりや、問題ない。荒ちゃん、三十分、いや二五分で、原稿書けるな」

「ええ」

言うが早いか、幸一は手近なデスクに座り、ワープロのスイッチを入れた。

「おい、製版にまわせ。大マキでな」

伊神は、幸一が持ち込んだ、その写真を、そばにいた編集部に手渡した。

幸一は、何かにとり憑かれたように、一心にワープロのキーを打っている。

編集部員たちは、それをじやましないように、遠まきに見ていた。みんな、幸一には一目置いているのだ。

幸一はまだ二五歳。そこにいる社員記者たちよりずっと若く、しかもフリーの身だ。にもかかわらず、全

員が敬意を払っているのには、理由があつた。

かつては弱小雑誌だった「リベレーション」は、ここ数年飛躍的に部数を伸ばしている。その最大の理由は、政治ネタ、マル暴ネタに強くなったからだと言われる。そして、それは、じつのところ、幸一の力によるところが大きいのだ。その一匹狼的な体当たり取材がなかったなら、とても、あれほど世間を騒がせるスクープを連発できはしなかつただろう。

じつは今夜も、保守党最大派閥の桐沢幹事長が、赤坂の料亭で、広域組織暴力団峰岸会の石黒会長と密会しているところを突き止めたというわけだ。

「デスク、こんなもんでどうですか？」

ワープロを打ち終えた幸一は、伊神を呼んだ。

伊神は、ワープロのディスプレイをスクロールしながら、文章にざっと目を通した。

「よし。：：梅川、すぐ写植にまわせ」

伊神の言葉が終わらないうちに、幸一はフロツピーディスクを抜き取り、待機していた副編の梅川にトスした。

「これで新年合併号は、またうちのいただきだな」

二時間後、特急で届いた校正刷りを囲み、片隅のソファで、伊神と梅川、それに幸一は、缶ビールの祝杯をあげていた。

「荒ちゃん、あんたのおかげで、今年は、だいぶ抜かせてもらったからな。今回のギヤラ、特Aランクでいくように、経理に言っとつから」

「来年からも、ずっとそうしてもらえると、ありがたいですけど」

「おー、おー、すぐこれだ」

伊神と梅川は、苦笑しながらも、機嫌はすこぶるいい。

「で、その顔の傷の武勇伝を聞かせてもらおうか」

「え？ ああ、これですか。峰岸会の若いもんからはうまく逃げたんですが、桐沢の秘書にとつ捕まりましたね」

「やったわけ？」

梅川は、ボクシングのジエスチャーで聞いた。

「ええ、ちよつと……」

「荒井幸一は、死んでもカメラを放しませんでしたっ

てわけだ」

「しかしなあ……」

幸一は、テーブルの上の校正刷りを手に取り、それを見つめながら言った。

「なんだ？」

「二人を同じショットに入れたかったよなあ。料亭の玄関を別々に出るところ撮ったって、奴らしやあしやあと言ひ逃れるに決まってるから」

「まあ、それはしやあないだろ。奴らだって、この時期、警戒してるんだ」

「いえ、宮原がいたら、料亭に忍び込んででもツーシヨット押さえてますよ」

「宮原か……。どうしてんだか……」

伊神は、ちよつと考え込むように言った。

宮原達夫は、幸一がずっと組んできたカメラマンだ。

幸一は、本来、カメラマンではなく、ライターである。

この編集部にコネをつくって最初に仕事をした頃、同じくフリーでここに写真を持ち込んでいた宮原と知り合い、意気投合した。同い年であることもあり、妙に馬があつたのだ。二人はいつしかチームで動くようになっていた。だから、幸一がものにした多くのスクープは、同時に宮原のスクープでもあつた。

それが、半年ほど前、何の前ぶれもなく、宮原は姿を消してしまった。幸一にも、友人や親兄弟にも行き

先を告げない、失踪と言ってもいいような消え方だった。

それ以来、幸一は、カメラも自分でやっているのだ。

「このごろ、宮原の失踪は、仕事がらみじゃないかって気がしてんですけどね、俺」

幸一は、心に引っかかっている思いをはじめて口に出した。

最近になって、宮原の親から警察に搜索願いが出さ

れたが、独身の――それもフリーランサーの――男が姿を消したからといって、警察はまともに取り組んではくれない。

「仕事？　しかし、宮原はずっと荒ちゃんといっしょに仕事してたんだろ」

「宮原の持ってきた話、俺が断ったんですよ。あの時は」

「へえ、初耳だな。で、宮原は何を追ってたんだ？」

「いえ、そうたいしたもんでもないですよ。なんでも、面白い『自己開発セミナー』を見つけたとか言うて……」

「自己開発なんとかって、あれかい。『本当の自分を発見する』とか『隠れた能力を引き出す』とか……？」

「ええ。そんなの、俺、興味ないから『やりたいなら、勝手にやったら』って言ったんですよ」

「スキヤンダルの臭いのしないもんは、食指が動かん

てわけだ」

「そんなこともないですけどね……」

凶星を突かれて、幸一は苦笑した。

「で、その自己開発セミナーとやらは、なんていうグループなんだ？」

「それが、覚えてないんですよね。ほんとに興味なかったから」

「ふーん……」

伊神は、ちよつと深刻そうに呟いてから、話題を変えたとでもいうように、からかい半分の口調で言った。

「しかし、よく考えてみると、荒ちゃんのまわりで二人の人間が失踪中ってわけだ。なんか、荒ちゃん本人が恨みでもかってんじゃないの」

伊神の言葉に、梅川はちよつと非難するような目配せを送った。幸一の心中を察してのことだ。

「……いいんですよ、梅川さん。俺が女房に逃げられ

たつてことは、もう、みんな知ってることなんだから」
幸一が目配せに気づいてそう言ったので、梅川は苦笑いを返した。

幸一は、伊神に向かってつぶけた。

「そりゃ、俺には、敵はいっぱいいるでしょ。でも、宮原の失踪はともかく、女房の場合は家出だから。置き手紙もあったわけだし……」

「でも、いまだに行方知れずで、実家にも帰ってない

んだろ」

「両親なくしてて実家はないんですよ。親がわりつていうのはいるんですけどね。ただ、今時珍しいくらい古いタイプの女でしたから、その人の反対押し切って結婚した以上、そこにも帰れないんですよ」

浩一の言葉に、伊神はちよつと考えてから、言った。

「なあ、荒ちゃん。気にせんで聞いてもらいたいんだが、こういうことは考えられんか？　奥さんの家出と、

宮原の失踪は、じつは関係がある……」

「え、どういうことですか？」

「二人は、知り合いだったんだろ」

「ええ、宮原は、女房がいる頃にも、何度か家へ来た
ことがありますから……え？　まさか、それはないで
すよ」

「なんでないって言い切れるんだ？　女性の蒸発で、
いちばん多い理由は、今も昔も、男関係だからな」

「でも、女房がいなくなっただのは、二年も前のこと。

宮原は半年前ですよ。一年半もタイムラグがあつては、いくらなんでも無理がありませんよ。それに、宮原はそんな奴じゃないし……」

いかにも写真週刊誌編集長らしい伊神の発想に、そんなことを考えてもみなかった浩一は、ちよつと驚きながら反論した。

中国語、フィリピン語、英語……。さまざまな言葉が耳に飛び込んでくる。それらの言葉を知らなくても、いかがわしげな単語はなんとなくわかるから不思議だ。

幸一は、そんないかがわしさのまっただ中を、ダウンジャケットのポケットに手をつっこんで歩いていった。

クリスマスイブだからといって、深夜の歌舞伎町の

賑わいが、ふだんと変わるわけではない。ここでは、一年三六五日、やけっぱちの狂乱が繰り広げられていくのだ。

編集部を出た時には、そんなつもりはなかったのに、その狂乱に誘われるように、幸一の足はここへ向かった。

たぶんそれは、突然伊神の口から、妻、冴子の話題が出たからだろう。

目の前から姿を消して二年もたっていれば、ふだんは思い出すこともあまりない。それに、面倒なので籍はそのままにしてあるにしても、しよせんは逃げた女だ。未練などない。

ただ、特ダネをものにし、気持ちの昂ぶっていると、ころに、冴子の話題が出たせいで、幸一の体の中にもやもやとしたものが残った。

要するに、女の体が恋しかったのだ。

ここへ来れば、とりあえず女は抱ける。女は女。それが、商売女であろうが、恋人であろうが、妻であろうが、変わるものではない。今の幸一は、そんなふう

に思っている。

いや、冴子と暮らしている頃だって、本質的にはそう思っていたのだ。あの頃、幸一が冴子を愛していたのだとしたら、その「愛」の対象は、冴子の肉体でしかなかったのだから。

「それにしても……」

今夜、自分の欲望を処理するための場所を物色しながら、幸一は、思わずひとりごとを呟いていた。

「伊神さんも、おかしなことを考えるもんだぜ……」
冴子と宮原が男女の関係を持っていたなどとはとても考えられない。だいいち、冴子は浮気などできる女ではないのだ。それは、冴子という女を誰よりも知っている幸一の確信でもあった。

しかし、それにも関わらず、今夜の幸一は、なぜか伊神の言葉が心にかかって仕方がなかった。

そのせいだったかもしれない。

幸一は、その時、目の前を一瞬横切った女に、ふつと視線を奪われた。

女は、幸一の傍らにある自動販売機から煙草を買ったところだったようだ。財布と煙草を小振りなバッグにしまいながら、幸一の前を通り過ぎ、酔客たちが行

き交う道の反対側へ渡った。

幸一は、女を目で追っていた。

なぜだか、その女が気になった。

何がどう気になるのか、自分でもよくわからなかった。それは、直感のようなものと言ってもよかった。

幸一は、女の後を追った。

人混みの中に見えかくれする、女の後ろ姿を尾けながら、幸一は、もう一度、女を観察した。

後ろからでは、顔は見えなかったが、その女は、どうやら水商売——それも、けっして上等とは言いがたいところで働いているようだった。

肩のあたりまでの、茶色に染めた髪。安物のフェイクファーらしいショートコート。ミニのスカートから伸びた脚は素足で、季節外れの真っ赤なサンダルをはいている。その歩き方は、どこか投げやりでぞんざいだ。

たぶん、煙草が切れて、店を抜けて買いに出たのだらう。

幸一は、女を追いながら、自分が、なぜこんな女に興味を持ったのか、説明づけようと試みた。

(……どこかで会ったのか?)

そんな気もしたが、いくら記憶の糸を手繰りよせても、その女に該当するような人物を思い出すことはできない。

では、なぜ、この女がこんなに気になるのか？

幸一が答えを出すより先に、女は、小走りに、裏通りのすすけた感じのビルの狭い階段を降り、地下へと消えた。

その階段に近づくと、そこに、毒々しい電飾看板が取り付けられていた。

『ファッションヘルス アンドロ』

「なんだ……」

その看板を見て、幸一はちよつとがっかりしたように
呟いた。

女の身元が、あまりにも想像どおりだったせいだ。

しかし、幸一は、その階段を降りた。

その女に対して、自分が感じた「何か」が、どうし
ても心に引つかかった。

誤字だらけの呼び込みチラシが貼られたドアを開け
ると、ちんけなカウンターがあり、そこに男がいた。

「いらっしやいませ。ご指名は？」

男は、片方の口の端をひきつらせるような愛想笑いで言った。

「今、ここに入ってきた子を」

「……え？」

男は、ちよつと意外そうな顔で幸一を見上げた後、幸一のさしだした前金を受け取って、「どうぞ」と、合板で仕切られた小部屋へ案内した。

精液の臭いがしみついた、息苦しい二畳ほどの個室でソファにかけ、幸一は女を待った。

五分くらい待たされたろうか。

ドアがノックされ、女が入ってきた。

安っぽいシースルーのブラウス、もうしわけ程度に腰に巻き付けられた真っ赤なミニスカート、そして素足、というのが女のいでたちだった。

その顔を見上げ、幸一は、先刻、カウンターの男が

意外そうな顔をした理由がわかった。

女はとても美人とは言いがたい御面相をしていた。

おそらく、指名の客が来るなど初めてのことだったのだろう。

顔立ちが貧相なだけではない。厚化粧をしても、その下の肌が、水気なく、かさかさしているのがよくわかった。

(ひよっとして、シヤブ中か……?)

幸一はそう思った。

にもかかわらず、幸一は女の顔を見つめた。先刻から気にかかっている「何か」は、顔を見て、ますます大きく膨らんでいくような気がした。

そして、女もまた、つつ立ったまま、幸一の方を、惚けたように見っていた。

「……どうしたんだ？」

幸一が言うと、やっと女は視線をそらし、持ってい

たおしぼりののつたトレーを小さなテーブルの上に置いた。

そして、まるで事務的とでもいうようにブラウスを脱いだ。やはり、肌が乾いた貧相な乳房がその下から現れた。

幸一がソファに横になり、見ていると、女は無表情のまま、幸一のズボンのベルトに手をかけ、それをはずし、ファスナーを下げた。

トランクスの下から幸一のものを引き出す。

女の姿と態度のせいで、さほど昂ぶつてはいなかった幸一のものも、その手に触れられ、勃起していった。

と、突然、女の目つきが変わった。

女は、大きく目を見開いてそれを見ると、せつなそうに体をくねらせ、いきなり、むしやぶりつくように頬ずりしだした。それまでの事務的で投げやりな仕草が一変した。女は、憑かれたように一心不乱に、それ

にキスし、嘗め、そして、くわえた。

(こいつ……、本物の淫ニシフオマニア乱か?)

幸一は、すこし薄気味悪い思いで、そんな女を見ていたが、女の過激な奉仕の方が、それに勝った。

やがて、刺激に耐えられなくなった幸一は、腰を突きだし、うめいた。

女は、幸一のものから出た液体を喉を鳴らして飲み下し、同時に、大きく体をくねらせた。

「あ、：：あー」

不思議なことに自らも絶頂を迎えたらしい女は、むき出しになった幸一の太股に乳房を押しつけてしなだれかかり、なおもその手をペニスのまわりに這わせ、焦点の定まらない目で、幸一を見た。

その時、幸一は、ふいに先刻からの疑念の正体に気がついた。あまりにも異常すぎて考えてもみないことだった。

「……お前……!?」

幸一が言った。

女は、いまだ狂気の眼差しのまま、答えた。

「ふふふ……。驚いた？ あたし、こんなふうになつてしまったの。笑って。もう、これがなければ生きられない、お・ん・な」

女は、そう言って、また、幸一のペニスに手をかけた。

「やめろ！」

半身を起こした幸一は、女を突き飛ばした。

床の上に崩れ落ちた女はおびえたような表情で幸一を見上げていたが、やがて、その狂った面もちに正気が戻ってくると、わなわなと震えだした。

そして、いきなり立ち上がると、そのまま、部屋を飛び出した。

「待て……」

幸一は、思わず叫んでいた。

「待つんだ、宮原」

2

生贄いけにえの後景

朝からのみぞれが、雨に変わった。

そのせいで、根雪までが溶けだし、シャーベット状になっている。歩きにくい上に、ズボンの裾がびしょ

濡れだ。

地元の間人は、この季節の気象の変化を心得ているのだろう。ほとんどがゴム長を履いて、火葬場から駐車場までの道を歩いていた。

黒礼服に長靴などという発想は持っていない幸一が、けつきよく、会葬者の中でいちばん惨めな格好をしていた。

「車をまわしますで、ここで待っとなつてください」

そんな幸一を氣遣って、宮原の叔父にあたるという人が言った。うなずき、立ち止まった幸一は、出てきたばかりの建物を振り返って見上げた。

窯の底に落ちた遺体の燃えかすがくすぶってでもいるのか、煙突からはまだ、微かに黒い煙が立ちのぼり、それが、どんよりとしたグレーの空に溶けていく。

晴れた日には、たぶん、雪におおわれた中央アルプスの稜線がくつきりと見えるのだろう。宮原が愛して

いたというその山さえ、今は、薄気味悪い影でしかない。

冬の終わり。長野の谷間の村の悲しみは、そんな、どこか形の定まらない不気味さの中でくすぶっていた。

「姉も義兄さんも、棺桶の中を身内のもんにも見せようと思わなかったですよ」

幸一が4WDのジープに乗り込むと、宮原の叔父は

そう言った。

「そりゃ、そうですね。まさか、あの達ちゃんが、オカマになつとるとは。胸までふくらましとったそうですね」

まだ四十そこそこだろう。いかにも人のよさそうな叔父は、シヨックと悲しみのトーンで話しているのだが、その中に、若干の好奇心が混じっていることも、また確かだった。

「荒井さんは、生前の達ちゃんに最後に会った人だそうですね」

「え？ ええ、まあ……」

叔父の言葉に、幸一は、どこかあいまいに答えた。

警察には、変わりはてた宮原と再会したいきさつを隠さず供述したが、まさか身内には話せないだろう。

宮原が自殺する直前にしたことは、幸一へのフェラチオだった、などとは。

「お友だちに、女になった姿を見られて、シヨックだったんやろね」

「さあ、よくわかりませんが……」

幸一は、またもあいまいな答え方をした。しかも、今度は、その質問を拒絶するような冷たい声音が混じった。

宮原の死の直接の原因が、自分だとは思われたくなかった。もちろん、幸一自身もそうは思いたくないの

だ。

その語気を察してか、宮原の叔父は、しばらく黙って運転をつづけた。

しかし、火葬場からの山道を降りきって、県道へ出たところで、また、ぽつりと言った。

「だけんど、どう考えてもわからんです。あの達ちやんが、なんでオカマになりたいなんて思ったか……」

「ええ、それは、僕もまったくそうです」

幸一は、はじめて叔父の言葉に同意した。

新宿のヘルスで、女の姿の宮原が部屋を飛び出した時、幸一は、すぐに後を追おうとした。

しかし、その時、幸一はズボンとトランクスを膝まで下げた状態だったのだ。それが、遅れをとる原因になった。

あわててズボンをあげ、部屋を飛び出した時には、

宮原の姿は、すでにその店から消えていた。

店内を見まわした幸一は、カウンターの男が驚いたように出口の階段を見上げているのに気づき、その男を尻目に、階段を駆け上がった。

店の外に出ても、歌舞伎町の人混みの中に宮原の姿はなかった。

しかし、その人の波の、ある方向だけにざわめきが残っていた。

宮原は、ミニスカートに、上半身裸という姿で飛び出したのだ。真冬の街を、裸の女——宮原の胸には、貧弱ながら乳房もあつたのだから、人々は女だと思つただろう——が走って行けば、いくら何が起こつても不思議ではない歌舞伎町でも、通行人たちはびっくりしたにちがいない。

幸一は、瞬時にそう判断し、ざわめきの方向に走つた。

しかし、三十秒も走ってはいないところで、幸一は思わず立ちすくんでしまった。

幸一の二十メートルほど前方の空中に、白い影が舞ったのだ。

そこは、ある大きなビルの裏手の非常階段だった。その四階あたりから、人が飛び降りたのだった。

悲鳴が聞こえ、人波がさっと広がった。その後、すぐに鈍い音がし、人の輪はさらに大きく後ずさった。

幸一が、人をかき分け、輪の中に駆け込んだ時には、中央に倒れた宮原のまわりは、すでに血の海になっていた。

幸一は、駆けつけた警察に、自分から事情を告げた。その場でへたに身を隠しでもしたら、自分が怪しまれないとも限らないと思ったからだ。

幸一は警察に連れて行かれ、明け方まで調書をとられた。宮原が働いていたヘルスの主人——例のカウン

ターの男だ——もいっしよだった。

翌朝、知らせを受けた「リベレーション」誌副編集長の梅川がやって来た頃には、すべての調べが終わり、帰ってもいいと言われた。

警察は、宮原の死を、精神錯乱による衝動的な自殺として処理した。

第一に、目撃者の証言などあらゆる状況から見て、そうとしか考えられないこと。第二に、宮原が、強度

のアルコール依存症だったらしい上、その体には、短期間に大量の女性ホルモンを投与した形跡があり、極めて情緒が不安定だったと考えられること。

それが、その理由だった。

異常な事件ではあったが、遺族のプライバシーに配慮してか、警察は、あまり詳しくは事件の内容を公表しなかった。そのおかげで、死の直前、幸一と宮原の間でどんなことがあったのかも、表沙汰にはならず

すんだ。

不況下の年末で、他にもさまざまな事件が頻発していたことも幸いした。「性転換男自殺」という小さな記事が、翌日の新聞に載っただけで、それ以上はマスコミも騒がなかった。

身元のわからない人間を雇っていたということ、ヘルスの主人は多少お目玉をくらったようだが、彼は平然とこう答えたという。

「うちみたいな店で働きたいという子は、みんな堕ちてくる子だからね。ああ、あの子が男だということは、最初からわかってたよ。でも、前にもゲイボーイくずれが何人も勤めてたしさ。酔った客には、それでもわからんのよ。それに、あの子、顔はひどくて、ここもいかれてたけど、アレが好きでたまらんって子だったから：：」

けつきよく、警察が最も手こずったのは、宮原の両

親に、その遺体が自分たちの息子であると認めさせることだったらしい。

幸一の証言もあつたし、ホルモンで体形は変わっていても、手術はしていず、身長や顔の特徴が捜索願いが出していた宮原と一致したため、警察でははじめから遺体を宮原と断定していた。

ところが、長野から出てきた両親は、遺体の引き取りを拒否した。

「あんなにやんちゃ坊主だった達夫が、こんなふうになるはずがない」というのが、両親の言い分だった。

以前宮原が通っていた歯科医に来てもらって、齒形から同一人物であることを証言してもらっても、両親は納得しようとしなかったという。

けつきよく、司法解剖が終わった宮原の遺体は、両親がその事実を受け入れるまで、三ヶ月間も大学病院の霊安室で冷凍されたままになっていたのだ。

今になって、身内だけで密葬が行われたのは、そんな理由からだった。

「宮原君の遺品のようなものがあったら、見せていただけませんか？」

宮原の実家に戻った幸一が遠慮がちに言うと、宮原の父は、堅い表情のままであらずいた。

その態度には、幸一のことをけっしてよくは思っ

いない心情が表れていた。理不尽な事実を受け入れた今も、遺体を自分たちの息子だと最初に証言した幸一のこと、許せないのだろう。

いったん奥に引っ込んだ後、宮原の父は、手に持った安物のボストンバッグを、幸一の前に、まるで放り出すように置いた。

「荷物は、それだけだったそうdade」

事件当時、宮原は例の店があてがった狭い安アパー

トで暮らしていたらしい。そこに残されていたのが、このバッグひとつだったという意味だろう。

失踪する以前、宮原はワンルームのマンションに住んでいた。最近になって、両親が引き払うまで、マンションの部屋はそのままになっていたということだから、そこには当然、もつとたくさんのもものが残っていたはずだ。

幸一はそれも見せてもらいたかったのだが、木で鼻

をくくったような父の態度に、言い出すことはできな
かった。

「そんなもん、なんだったら、持ってたってもらっても
ええで」

ぶつきらぼうな言葉に、ますます気まずい思いでバ
ッグを開けた幸一は、中を見て、父がそう言った理由
がよくわかった。中には、女物のワンピースが一枚と、
ブラジャーなどの下着類が入っていたのだ。

それ以外には、小型版の分厚い書物が一冊だけ——
「……聖書？」

幸一は、その書物を、バッグから引っ張り出して、
首をかしげた。

それは、どこの本屋にも一冊は置いてあるような、
なんの変哲もない口語訳の聖書だった。ただ、何度も
読み返した形跡があり、中を開くと、一部には、赤い
傍線まで引かれていた。

宮原がクリスチャンだったとは聞いたことがない。先刻の葬儀も仏式だったから、実家もそうではないのだろう。死んだ当時の宮原の暮らしぶりも、どう考えても、聖書とは結びつかない。

(どういうことなんだ……)

幸一が考え込んでいると、宮原の父が不機嫌そうに言った。

「あとは、身内のもんだけで初七日の法要をするで、

悪いが、帰ってもらえんかね」

幸一は、その聖書をバッグにしまい、「ちよつと預からせてください」と言つて、座敷を立つた。

そして、宮原の実家の玄関を出た時だった。

幸一は、ふいに何かの気配を感じ、緊張した。

「……？」

気配の正体は、音だった。

ふつうの人間なら、聞き逃すような微かな音。しかし、幸一には聞き慣れた音だ。いやが上にも、職業的な緊張感を強いるそれは――、カメラの連続シャッターの音だった。

「……！」

見まわした幸一の目に、庭の鶏小屋の陰で、ベージュのコートの人影が動くのが映った。

「誰だ！」

幸一は、思わず叫んで、走り出していた。

それに気づいた人影は、その場を離れ、逃げだした。

農家造りの庭の、納屋の間の出口を抜け、人影は、

田舎道を一方へ走った。飛び出した幸一も、そのあとを追った。

雨はやんでいたが、道は、雪が溶け、泥と混じつてぬかるんでいた。それでも、逃げる人物と幸一の距離は、確実に狭まった。

逃げている人物が女だったからだ。

二十メートルほど走ったところで、幸一はすでに女のすぐ後ろまで迫っていた。

幸一は手に持っていた宮原のボストンバッグをバツクスイングし、何の躊躇ちゆうちよもなく、女の肩のあたりを殴りつけた。

反動で雪に足をすべらせた女は、その場にみつともなく投げ出された。持っていたカメラが、女からさら

に二メートル先に飛んだ。

幸一は、すかさずそれに近づき、拾い上げ、蓋を開けて、中のフィルムを引っ張り出した。

「なにするのよ！」

起きあがった女は、ひるむことなく、幸一に飛びかかった。ショートカットの顔も、コートもすでに泥まみれだ。

「うるせい」

カメラを捨てた幸一は、また、迷うこともなく、女の顔にカウンターパンチを浴びせた。

女の体が、また飛んだ。

さらに幸一は、倒れた女に飛びつき、その肩からシヨルダーバッグを奪い取ると、中から、撮影済みらしい数本のフィルムを取り出した。それを道に捨て、踏みつける。

「やめてよ」

女が、這ったままの格好で幸一の足にからみついたときには、フィルムは、雪にめり込みながらもパトロ―ネが壊れ、すでに露光していた。

「なんの権利があつて、こんなことするのよ」

なおも睨みつけながら、幸一の足を持って倒そうとする女を、幸一はさらに容赦なく蹴り上げた。

女の体はもんどり打って倒れた。その口の端に、血がにじんでいる。

「覚えとけ。俺は取材するのは好きだが、されるのは大嫌いなんだ」

幸一が、吐き捨てるように言うと、女は、つらそうに片手をついて半身を起こした。相当にダメージを受けているようだ。しかし、それでも幸一に対して言い返してきた。

「あなたもジャーナリストのはしくれなら、こんなことしたら、どうなるかわかってるんでしょね。警察

に訴えるわよ」

「ふふ：：。聞きしに勝るじやじや馬だぜ」

幸一は、馬鹿にしたように笑ったあと、つけ加えた。

「あんた、たしか桜井なんとかって言ったな。前から
気に入らなかつたんだが、この際だから忠告しとくぜ。

この仕事は、女なんかにできるような甘いもんじやないんだ。お嬢さんは、家に帰って、花嫁修行でもしてな」

東京へ向かう上越新幹線の車上で、ビールを飲みながら、幸一は、宮原のことを考えていた。

宮原が失踪していた半年の間に、いったい何があったのか？ 東京へ帰ったら、本格的にそれを探ってみよう。

幸一は、そう決心した。

もちろん、友人の異常な死に対する疑問を解きあか

したいという気持ちもある。そして、「事件」に対する職業的興味もあつた。しかし、それにも増して、幸一の気持ちを駆り立てていたのは、桜井睦美が首をつつこんできたという事実だつた。

睦美は、やはり写真週刊誌のフリーライターだ。幸一が書いている「リベレーション」の競合誌、「シヨッキングショット」に記事を提供している。

女性ライターはほとんどいない業界である上に、モ

デルにでもなった方がいいという美人。その男勝りの
気の強さともあわせて、一部には、すでに名が知られ
ていた。

幸一自身も、——それが、顔を知っていた理由だが
——「現場」で、何度か鉢合わせをしたことがある。

そしてさらに、女ということのをのぞいても、睦美が
業界で注目されているのは、幸一と同様、自分から持
ち込んでいるらしいその記事で、何度も世間を騒がせ

るすっぱ抜きをやっているからだ。スキャンダルライターとしての、確かな嗅覚のようなものを持っているのだ。

その睦美が、長野の片田舎の葬儀をそっと取材していた。彼女がどんなカードを握っているのかはわからないが、宮原の死の陰には「奇妙な自殺」という以上の何かがあるにちがいなかった。

幸一は、ヒット記事をものにするという以上に、女

だてらに業界を荒らす睦美の鼻を明かしてやりたいという思いにかられていた。

：：しかし、それにしても、何から手をつけたらいいのか？

幸一はそう考えながら、網棚の上の宮原のバッグを降ろした。

今ある手がかりは、これだけだった。

幸一がバッグをあけると、隣のシートの男が驚いた

表情をした。その中にフリルのついた女性下着が見えたからにちがいない。

そんなことにはかまいもせず、幸一は例の聖書を取り出した。

宮原が引いたと思われる傍線は、旧約新約を通して全般に及んでいたが、特に旧約聖書冒頭の創世記二章と三章、つまりエデンの園の部分には、紙が真っ赤になるほどに引かれていた。

幸一はしばらく傍線部分を拾い読みしたが、聖書に関する詳しい知識など持ち合わせているわけもなく、けつきよく、その意図はよくわからなかった。

新幹線が東京に近づき、その聖書から何かを読みとることをあきらめかけた頃だった。

ぱらぱらとめくっていたページの間から、一枚の紙が足元に落ちた。

拾い上げると、それは四つ折りにしたA4版のチラ

シだった。しおりがわりにでも使っていたのだろう。きちょうめに折り畳まれたその紙面を開き、幸一ははっとした。

そこには、こんなキャッチフレーズが書かれていた。

「隠れた本当のあなた自身を発見するために――スピリチュアル・リボーン・アソシエーション」

失踪する直前、宮原は幸一に「面白い『自己開発セミナー』を見つけたから、取材してみたい」と言っ

いた。

おそらくこの「スピリチュアル・リボーン・アソシエーション」という団体が、それなのだろう。

幸一は、とりあえずのねらいを、ここに定めることにした。

山手線の恵比寿駅の南。防衛研究所のそばの閑静な住宅街に、そのマンションはあった。

東京に帰り、チラシに書かれた番号に電話して「入会したい」と言うと、「一度、本部まで手続きに来てほしい」という返事が帰ってきた。

それで、地味な背広を着込み、ごくふつうのサラリーマンを装って、幸一はここまで来てみたというわけだ。

マンションは、どの部屋もワンルーム形式のようだった。メールボックスのネームを見ると、住居として

より、事務所として使われている方が多い。

幸一は、エレベーターで六階まで昇った。五部屋あるうちのひとつのドアに「S R A」とだけ文字が刻まれたプラスチックプレートがついていた。

ノックをすると、中から「どうぞ」という声が返ってきた。

部屋は、パソコンなどの置かれたワイドタイプのデスクふたつが半分を占め、あとの半分に来客用らしい

洒落たテーブルのセットが置かれていた。

「荒井さんですね。どうぞ、そちらにおかけください」
デスクにいた女が、少し首をかしげるような素振り
で言った。

幸一は、ちよつとの間、その女の顔を食い入るよう
に見つめてしまった。

長い髪に、大きなリボンタイのついたブラウスのそ
の女は、驚くほどの美人だった。それも、最近流行り

のキャリアふうの——たとえば睦美のような——美人ではない。清楚な、古典的なタイプの美人と言ったらいいだろうか。

つまり、幸一の好みのタイプなのだ。

「どうかしまして？」

「あ、いや……」

自然な微笑とともに言った女の言葉に、幸一は珍しくどぎまぎして、テーブルについた。

デスクを立った女は、コーナーのコーヒーマーカーでコーヒをいれ、トレーにのせて持つてくると、もう一度デスクに戻り、書類のファイルを取ってから、幸一の向かいに腰掛けた。

幸一は、その一連の立ち居振る舞いをずっと見ていた。

手際よくことを進めながら、その動きは、つつましさやかで気品が漂っている。その上、細身のその体から

は、色香が立ち昇っている感じなのだ。

「わたくし、このセミナーのアシスタントトレーナーを勤めております宮内里佳ともうします」

女は、まず、そう自己紹介した。

「さっそくですが……」

書類を開きながら、里佳はつづけた。

「わたくしどもの会を、どこでお知りになりましたの？」

「え？ いえ、あるところで、このチラシを見て……」
幸一は、そう言いながら、例のチラシをテーブルの上
上に置いた。

「これは、一年ほど前に一度だけ出したチラシですわ。
じつは、宣伝めいたことをいたしましたのは、これ一
度きりなんですのよ。今、新しく会員になれる方は、
ほとんど、以前セミナーをお受けになった方のご紹介
でいらっしやるものですから。それで、不思議に思っ

てお聞きしましたの」

「紹介がないと、入会できないんですか？」

「いいえ、そんなことはございません。わたくしどもは、真面目に人生を変えようとなさっている方なら、どなたでも歓迎いたしますわ」

そのあと、里佳は、幸一にあれこれ質問し、入会のための書類をつくった。

幸一は、名前や生年月日、住所など、さしさわりな

い部分は本当のことを言い、勤め先や入会動機などは、
適当なつくり話で答えた。

相手に嘘だと気取られないように頭を回転させながら
らも、幸一は自分がどこか上の空なのに気づいていた。

魅力的な里佳の表情や仕草が、気になって仕方がな
いのだ。

俺は、いつか、この女をものにしてやる。

幸一の頭の片隅には、ずっとその思いが渦巻いてい

た。

「わたくしどものセミナーのカリキュラムは何段階かに分かれています。まずは三日間、都内のホテルで行われるビギナーズ・セミナーに参加していただきませう。その受講料、三十万円を、開講日までにご用意いただけますか？」

その「面接」がどうやら終わりに近づいた頃、里佳が言った。

「ほお、ずいぶん高いんですね」

幸一は思わず本音で聞き返していた。

「ええ、お高く感じるかも知れませんが、私どものセミナーは、確実に本当のあなた自身を発見するためのノウハウを持っているつもりです。けっして、無駄なお金にはなりませんわ。それに、受講者の方にそれだけの覚悟を持って来ていただくためにも、必要な金額だと考えておりますの」

言っている内容は、かなり押しつけがましいことなのに、里佳の口から語られると、そうは思えないのが不思議だった。

「ふふ、あなたもここにたどりついたってわけね」

エレベーターを降り、マンションを出ようとした時、背後から声をかけられ、幸一は立ち止まった。

「俺を、つけてたのか？」

振り向きもせず、幸一は言った。すぐに、声の主が桜井睦美だとわかったからだ。

「そんなことはしないわよ。昨日みたいな目には、もうあいたくないもの」

「ふふ、殊勝なことを言うじゃないか」

そう言いながら、幸一が振り向くと、睦美は、メルボックスの前に、軽く腕を組んで立っていた。口の端には、昨日長野で幸一に蹴上げられた傷が残ってい

た。

「さつき、帰ろうとしたところで、あなたが入って行くのを見かけたから。私がここへ来たのは、たぶん、あなたと同じ目的よ」

「さあ、なんのことだか……」

「とぼけなくたっていいわよ。入会したんでしょ、S
R Aとやらに」

例によって男を男とも思わない睦美の物言いに、幸

一は腹が立ってきた。しかし、今日はその気持ちを押しさえた。

睦美が何を知っているのか。それを探りたいと思っただからだ。

と、睦美の方も同じことを考えていたらしく、こんなことを言い出した。

「どうやら、お互い、カンだけで動いているみたいね。あなたも、まだ、とても記事にできるほどのことをつ

かんではいない。そうでしょ。どう、この際だから、持ち札を見せ合わない？」

「ふふ、あんたが俺に抱かれないとでも言うなら、そうしてもいいぜ」

幸一は、からかい半分に答えた。

当然怒り出すだろうと思った睦美は、依然として、見下すような笑いを浮かべて幸一の顔を見ていた。そして、ちよつとの間をおいてから、言った。

「いいわ。私もこのところ、ご無沙汰だったし。ひと汗流したあとで、じっくり話しましょ」

睦美とのセックスは、まるで、昨日の格闘のつづきのようだった。

近くのラブホテルのベッドで、ふたりは、競い合うとでもいうように、お互いの肉体をむさぼり合った。

相手を、自分より先に絶頂に達させようと、長時間に

わたり、あらん限りのテクニックを駆使して、闘いを繰り広げたと言ったらいいだろうか。

いくら美人だとは言え、睦美のような女は幸一の好みではない。こんなセックスも、性に合わなかった。

しかし、先刻、里佳に対して抱いた欲情のくすぶりが、幸一を燃えさせていたのだ。

すべてのことが終わった時には、ふたりとも、ぐつたりと疲れきっていた。

「なかなか、よかったわよ」

乱れたベッドの上で、髪をかきあげながら、睦美が言った。

女の方からそんなことを言うこともまた、幸一には気に入らなかつたが、煙草に火をつけながら、それに答えた。

「満足したなら、あなたの方から言えよ」

「え：：、ふふ、せっかちなのね。いいわ。私が知っ

ているのは、あのS R Aってセミナーは、どうやら、エデンの真理教団の隠れ蓑で、信者集めの機関らしいってこと」

「エデンの真理……、新興宗教か？」

「え、知らないの？」

「あ……いや」

「ふ……、どうやら、今日の収支決算は、あたしの損益の方が大きいようね」

「なんなんだ、そのエデンのなんとかって？」

「ガードが堅くて、まだよくわからないけど、ひとくちで言ってしまうえば、女装教……」

「……女装？」

幸一は、火をつけた煙草をくわえるのも忘れて、睦美の顔を見た。

3

解脱げだつのマニユアル

朝八時。セミナー開講時刻までには、まだ余裕があった。幸一は、池袋の東口を出てビジネスホテル街へと向かうその道を、ぶらぶらと歩いた。

じつはつい最近、深夜、ここに取材に来たことがある。

その時、この歩道には、ほぼ一メートルおきにフィリピーナが並んでいた。まるで恋人でも待つかのように立つ女たちは、どの子もけっこう美人だった。通り過ぎる男たちは、その気があるものもないものも、女たちの顔を見比べて歩いていた。ところどころで「商談」が成立し、肩を組んで去って行くものもいた……。

しかし、今朝のその道は、そんな夜の光景など想像もつかないほど、東京のありふれた朝の様相を見せていた。

少々眠たそうなサラリーマンたちが、生真面目な顔で、幸一とは反対向きに駅へと急ぐ。他の街と違いがあるとするれば、彼らのほとんどが大きめのバッグを持っていることくらいだ。出張で東京へ来て、ホテルから本社や取引先に向かうのだらう。

しかし、考えてみれば、この男たちの何割かは、たぶん昨夜、フィリピーナを抱いたのだ。必要以上に真面目くさった表情は、そのことを隠すための仮面にすぎないのかもしれない。

虚飾の街、現代のバビロン、東京は、一事が万事、そんなふうなのだ。どろどろした欲望をきれいごとで覆い隠し、何食わぬ顔で取り澄ましている。

何が本当で何が嘘か。何が本音で何が建て前か。何

重にも仮面をつけた人々は、やがて、自分の正体さえ見失う。

新宗教だとか、自己開発セミナーだとか、うさん臭げなものが流行るのは、たぶん、そんな街の反映なのだ。

幸一は、一か月前、ラブホテルで、桜井睦美から聞いた話を思い返した。

「あなたはなんにも知らないみたいだけど、あなたの友だちの宮原ってカメラマンと似たような事件が、最近、地方都市で三件ばかりあったのよ。ただ、自殺にまで至ったのは彼だけだから、警察も関連に気づいてないけどね。」

三件とも当事者は二十代の男性で、一年から半年前に失踪してる。で、最近になってひよっこり帰ってきたり、さまよっていると場所を保護されたりした。その

三人すべてに、彼との共通点があったの。

そう。女装をして、ホルモンか何かのせいで体つきまで変わっているのね。しかも、多かれ少なかれ、精神に異常をきたしている。家族が男の格好をさせようとすると錯乱したりするの。

当然、家族たちは、彼らがどうしてそんなことになったか、問いただした。失踪以前には、そんなケのまったくないふつうの男たちだったわけだからね。

ところが彼らには、強い強迫観念があつて、失踪中のことは、あんまり話そうとしないらしいの。

それぞれの家族から聞き出した断片的な情報を総合すると、彼らはどうやら『エデンの真理』という宗教団体のコロニーにいたらしい。そこで何かがあつて、逃げ出してきた。逃げたことを彼らは罪だと思つて、ひどくおびえている。わかつたのは、それだけ。

三人とも今は入院中だから、そのうち、落ちついた

ら話し出すかも知れないけど、今はとても聞き出せる状態じゃないみたい。けつきよく、教団の所在も中味もまるでわからないの。

で、手がかりは、失踪前の彼らの行動ってことになるんだけど、三人のうち二人が、失踪する直前、家族とトラブルを起こしてるのね。その理由が、自己開発セミナーとかに凝って、お金をつぎ込んでいたってことらしい。一人の家族が『スピリチュアル・リボーン

・アソシエーション』ってセミナーの名前を覚えてた。それで、私は、S R Aに狙いをつけたってわけ。エデンの真理が『女装教』だとしたら、その信者集めのセミナーに女が入れるか疑問だったけど、申し込んだらすんなり入会させてくれたわ」

ラブホテルのベッドの上で、睦美は、おおむね、そんなことを話した。

睦美は、すでに十分にネタを調べあげた上で、S R

Aに接触しているのだ。文字どおりカンだけで動いている幸一とは大違いだった。

「なんだか商売敵に、大サービスしちやったわね」
話し終えた後、睦美はそう言った。

「これも、あなたのセックスが、ちよつとよかったからよ。また、その気になったらお相手してもいいわよ」
男を小馬鹿にしたような睦美の言いぐさに、幸一は腹が立った。

「俺はごめんだね。あんたみたいな女は趣味じゃない」
「ふふ、ごあいさつね。ま、いずれにしてもこれから
はライバル同士。SRAのビギナーズセミナーとかで
また会うかも知れないけど、その時は他人よ」

睦美は、鼻で笑うように言った。

とりあえずは、幸一の完敗だった。

ところが、幸一が参加したビギナーズセミナーに睦

美は来ていなかった。

会場になっていたのは、ビジネスホテルとシティホテルの中間くらいのグレードの、企業研修などにもよく利用されるホテルだ。セミナーは、そこで二泊三日の合宿という形で行われる。

ロビーにしつらえられた受付で三十万円の受講料を払い、割り振られたシングルルームに荷物を置いた後、幸一は、会場となっている会議室に入った。

十メートル四方くらいの会議室の中には、三十脚ほどの椅子が扇形に並べられ、すでに多くの男女が席に着いていた。ほとんどが二十代。中に三十代らしい人間が二三いた。幸一は、その、真ん中あたりの席に座った。

会場の前方には小さな演壇があり、その左後方の壁ぎわにセミナーの進行役らしい三人の男と二人の女が着席している。みんな若く、不思議に美男美女ぞろい

だ。一か月前、幸一の入会申し込みを受けつけた宮内里佳の、男をそそる魅力的な姿もあつた。

やがて、そのうちの一人が演壇に進み出てプログラムが始まつた。

「皆さん、自分発見の旅によろこそ。私は、このセミナーのチーフトレーナーを務める武田勇二といひます。あそこにいるのはアシスタントトレーナーたち。困つたことなどあつたら、彼らに相談してください」

武田と名のつた男は、里佳たちの方を指し示して言った。

（ふ……、『自分発見の旅にようこそ』か……。まるでデイズニールランドだぜ。）

幸一は、武田のジェスチャーをまじえた芝居がかった言い方に、思わず苦笑した。と——、

「そこのあなた、立ちなさい！」

武田の声が、突然トーンを変え、室内に響いた。

幸一が顔をあげると、武田は、前から二列目あたりにいた女性受講者を指さし、にらみつけていた。武田は細身だったが、よく鍛えられた感じの体つきで、眼光も鋭い。

指された女が、おずおずと立ち上がった。

「あなたは今、笑いましたね。なにがおかしいのですか？」

その女は、たぶん、自分と同じように感じたのだ、

と幸一は思った。

「……いえ、べつに……」

女は、武田の語気に気おされたように、びくびくした態度で答えた。

「べつに、なんですか？」

「……いえ、その……、すみません」

開講早々、いきなり詰問され、女はしどろもどろになっっている。

「誤解してもらっては困ります。私はあなたに謝ってもらいたいのではない。笑ってはいけなと言っているのでもない。その理由を聞いただけです。あなたがあなた自身の選択として笑ったのはあなたの自由だ。ただ、その行動を選んだには、それなりの理由があるはずだ。それを聞いているのです」

女は、真っ赤になってその場に立ちつくしていた。他の受講者たちも、ことの成りゆきに、緊張している。

「いいですか。このセミナーは、隠された自分自身の行動原理を解きあかし、本当の自分を発見するのが目的です。それは、自分の選び取った行動を自覚的にとらえることから始まるんです。自分の行動の理由が明確に言えないのは、あなたがつねづね無自覚な選択しかしてこなかった証拠だ」

武田は、強い語気でそう決めつけた。

（いよいよ始まったぞ……）

幸一は思った。

じつは幸一は、事前に「自己開発セミナー」なるものの内容を調べてみた。

有志が集まってやっているようなものから、事業として成り立たせているものまで、世間にはさまざまな「自己開発セミナー」があるようだ。

そして、その多くが、多分に「洗脳」的な色彩を持

っている。「洗脳」の仕方はだいたい決まっていて、閉鎖された空間の中で集団ヒステリーのような状態をつくり出し、セミナーの考え方を参加者たちに植えつけるらしい。

具体的には、トレーナーたち進行役の命ずるままに、発言や討議、あるいはなんらかの集団ゲームといったプログラムが行われる。その間、トレーナーたちは、煽ったり、批判したり、時にはつるし上げのようなこ

とをし、参加者を不安に陥れるような言動をとる。

そこで強調されるのは「自主性」だったり「アイデンティティ」だったりする。異様にテンションが高まった状態で、自分をさらけ出すことを強要され、その気になった人々は、これまでの自分にはなかった「自主性」が湧いてきたような気になるという仕掛けだ。

しかし、冷静に考えれば、その「自主性」は、多分に異様な雰囲気流された結果なのだ。つまり、まわ

りに左右されやすい、自我の弱い者ほど「自主性」や「アイデンティティ」を獲得しやすいという、おかしな構造だ。

幸一は「自己開発セミナー」の実態と矛盾を、そんなふうに理解していた。

このSRAのビギナーズセミナーも、第一日目は、ほぼそんな内容だった。

朝九時から夜八時まで、二度の食事をはさんで、受講者たちはずっとその部屋にかんづめにされ、トレーナーたちの指示で、プログラムをこなした。

最初は、どこか戸惑い気味だった受講者たちも、意外に早く、そのシステムに慣れ、独特の雰囲気ができあがっていった。午後になると、受講者の中から、全体の動きをリードし、トレーナーそっくりの口調で、他の受講者の言動を批判する者さえ現れた。

トレーナーたちは、受講者のちよつとしたあいまいさを見つけては、そこを追求した。その役割を担っているのは、どうやら武田と、あと二人の男性アシスタントだ。里佳ともう一人の女性は、控え目に段取りに従事していた。

一日目の予定が終了し、部屋に戻ると、意外なほど疲れていた。

幸一は、今日一日を冷静な観察者に徹していた。討議などで発言をしなけばいけない時も、できるかぎり差し障りのないことを言い、目立たないようにしていた。しかし、すでにできあがりつつある異様な雰囲気、どこか影響されているのかも知れなかった。体はぐったりしているのに、神経だけが妙に昂ぶっているのだ。

入浴後ベッドに入ってもなかなか寝つけず、夜半ま

であれこれ考えた。

入会手続をしてから一か月、幸一はただ待っていたわけではない。他の仕事の合間に、S R Aの正体を探ろうとさまざまなアプローチを試みた。

まず、すでに受講した者を探しまわったが、これはすぐあきらめた。膨大な東京の人口の中から探す手だてなど、ないといってよかった。

次に幸一は、都内のホテルをしらみつぶしにあたっ

た。ビギナーズセミナーはホテルで開かれると聞いたからだ。

すると、三つのホテルで順次、

スピリチュアル・リポーン・アソシエーション
S R A という名の団体の予約が入っ

ている事実がわかった。その間隔はおよそ一週間おき。

それぞれ二泊三日の予定で、予約人数は一回三十五名程度。トレーナーたちも含めれば今回のものと数はぴつたりだ。

それがすべてこのビギナーズセミナーだとして、受講者一人あたり入会金プラス受講料で三十万円。一回で計九百万円の収入になる。諸経費を引いても、宗教団体の集金組織としては極めて効率のいいものだ。

しかし、睦美が言っていたエデンの真理教とのつながりは、その存在の真否も含めて、いっさいつかめなかった。

（今日の内容にも、女装につながるようなものはなか

つたし……。

幸一は、そんなことを考えながらいつしか眠りにつ
いた。

二日目。

武田は、冒頭、こんなことを言った。

「このセミナーを進めていく上で、皆さんに体得して
もらわなければならぬ二つのノウハウがあります。

ひとつはミラーダイアログ、もうひとつはイメージメ
ディテーションと呼んでいます。今日は、その二つの
方法を使って、皆さん自身の行動原理を自覚する課程
にすすみたいと思います」

武田の説明によれば、その二つは次のようなものだ。
ミラーダイアログの方は一対一の対話。受講者が二
人ずつ組み、椅子を向かい合わせにし、文字どおり膝
を交えるほどの距離で話をする。ただ、相手の横に、

等身大の鏡が立てられるのが、その特徴だ。そこに、話したり聞いたりしている自分の姿が映されるのだ。つまり、相手と自分が真横に並んでいるように見えるのだという。

イメージメデイテーションの方は、文字どおり、瞑想しながら、トレーナーの支持に従って心の中にイメージする。ゆったりした姿勢で座ることと腹式呼吸がこつだという。

説明のあと、いよいよミラーダイアログをする事になった。アシスタントトレーナーたちが受講者たちを二人ずつの組にした。無作為にカップルにしているようだったが、すでに組み合わせが決められていたようにも見えた。

二人ずつ向かい合わせに座わらされた人々を見まわし、幸一は、その時初めて、受講者が男女同数なのに気づいた。すべての組が、男女のカップルになってい

るのだ。おそらく最初から数が調整されていたのだろう。同時期に入会したはずの睦美がこのセミナーに来ていないのは、男女比を揃えるため、他の週にまわされたからにちがいない。

アシスタントトレーナーたちが、たくさん姿見大の鏡を台車に乗せて持ち込んだ。幸一のパートナーとなつた女の横にもその鏡がセットされた。そこに幸一自身が映っている。幸一の横にも女を映す形で鏡が置

かれている。他のカップルも同じだ。部屋中に鏡の立てられた光景は、何か超現実的な感じがした。

「それではまず、お互い自己紹介をしてください」

幸一が組んだのは、近藤理恵子という二十五歳の独身OLだった。それなりに美人だったが、ちよつと神経質そうなタイプだ。

「自己紹介が済んだら、どちらからでもいいですから、今あなたが最も悩んでいることを話してください。隠

さず、自分の心の内をすべて吐き出すのです。しかも、できるだけ大きな声で。聞いている方は、相手の言っている内容を細大漏らさず覚えておいてください」

どのカップルも、最初はもじもじしていたが、会場内をまわりながらアドバイスするアシスタントトレーナーに促され、ぼそぼそと話し始めた。

「もつと大きな声で！」

時折、武田の声が飛んだ。

幸一は何を話そうか迷ったが、二年前、自分のもとを去って行方知れずになっている妻、冴子のことを話した。仕事上のことなどをうかつに話せば、身元がばれると思ったからだ。それに、対話を促すためにまわって来た里佳の顔を見て、自然に冴子のこと頭が浮かんだ。その時初めて気づいたのだが、里佳は冴子に雰囲気が似ていた。

相手の理恵子は、自分には男運がないのだという話

をした。これまで何度か恋人とつき合っては、結婚に至らず捨てられたのだという。この手のタイプに、よくありそうな話だった。

たぶんどのカップルも、話そのものはどうということもないのだが、再三にわたる「大きな声で話せ」という武田やアシスタントトレーナーたちの指示のせいで、会場全体が徐々に異様な雰囲気になってきた。ふだん自分の悩みを大きな声で話すなどということはない

いからだろう。それに、相手の横に自分が映った鏡があるというおかしな道具だてが、それを助長していた。つい、その告白は芝居じみたものになり、客観的な目を失う。中には、泣き出すものも現れた。理恵子もそうだった。

幸一はいささか閉口したが、武田の「相手の話の内容を覚えておけ」という言葉に従い、話に集中した。そのせいで、幸一自身もまわりの雰囲気はいささか影

響されたようだ。そんなに長時間話したつもりはなかったのに、武田が「終わりなさい」と言った時、時計を見るとすでに二時をまわっていた。

遅い昼食のあと、午後はイメージメデイテーションのプログラムになった。

全員が目を閉じ、体をリラックスさせて腹式呼吸をし、瞑想した。

最初は、ばらばらだった呼吸が、やがて、ひとつの不思議なリズムの中に落ちついていった。

そんな状態がかなり長時間つづいた後だった。武田の声が、まるで心の奥に語りかけるようにゆっくりと響いた。

「皆さん、あなたが十七歳だった時のことをイメージしてください」

一瞬受講者たちのため息が一斉にもれた。そして、

会場全体が、深い思念の中に入っていくように感じられた。

「あなたは今、十七歳です。日常の生活はどんなふうですか？ まわりの人間や親との関係は？ : : 今、あなたには、どうしても言いたい事、誰かに聞いてほしい事があるはずですよ」

そしてまた、長い沈黙がつづいた後、今度は突然、武田が叫んだ。

「さあ、お前の言いたいことを大声で言っ
てしまいなさい」

と、それをきっかけに、受講者たちが、堰を切ったように叫び出したのだ。

わけのわからないことを喚くもの、誰かのことを罵倒しているもの、まだぶつぶつ呟いているだけのものなど、さまざまだったが、多かれ少なかれ、全員が何かをしゃべっていた。

幸一も、我知らず「馬鹿野郎！」と言っていた。

（しまった！）と、幸一は思った。これは一種の催眠術だ。午前中の奇妙な告白ゲームの中でつくられた気分のせいで、受講者たちは催眠状態に入りやすくなっていたのだ。覚醒している部分でそう感じる一方、幸一自身もまた、そのイメージに縛られていた。

武田は、会場内が静まるのを待って、次には「では、十五歳、中学三年生だった時のことをイメージしてく

ださい」と、また静かな声で言った。

同じことが繰り返され、武田が「言いたいことを言え」と言った時には、先刻よりさらに大きな叫びが会場を覆った。

さらに武田は、十二歳、十歳、八歳、五歳、三歳、……と、イメージする年齢を下げていった。そのたびに、受講者たちの声は大きくなり、その内容はわけのわからないものになっていった。最終的には、ほとん

どが「お母さーん」とか「ママーツ」という叫びになった。幸一も、自分ではそんなことをするつもりはな
いのに、母の名を呼んでいた。

「……さあ、あなたは今、お母さんの胎内にいます」
武田が言った。

「今のあなたは胎児ですらない。受精前の卵子です。
あなたのところへたくさんの精子たちが押し寄せてき
ます。さあ、どの精子を選び取るか。あなたは、今、

初めての選択をするのです。それによつてあなたの今後の人生がすべて決つてしまいます。……」

そこで武田は言葉を止め、沈黙した。

瞑想する受講者たちのあいだに“おびえ”のような感情が広がった。それはまさに、これから生まれ出ようとする者の“おびえ”と言つてよかつた。

そして、その不安を打ち破るために、「叫び」を期待する雰囲気、会場いっぱい立ちこめた。

ところが、しばらく後、武田の声は、これまでにな
い事務的な響きで届いた。

「さあ、目を開けて。今日の予定はこれで終わりです」
受講者がちよつとざわめいた。全員がもやもやした
ものを残したまま、夢から叩き起こされたように感じ
たのだ。

しかし武田はそのざわめきには答えようとせず、乾
いた声でつぶけた。

「皆さん、今日は早めに寝てください。明日は、このセミナーで最も大事な一日です。それでは、解散します」

ぼんやりとした気分のまま夕食をとり、部屋に戻る。時計は九時を指していた。今日一日、自分が感じているのより時間のたつのがずっと速かった。

幸一は、うかつにも、彼らの術中にはまってしまっ

た自分を恥じていた。しかし、一方で自分の気持ちの中
中で解決できずに残されてしまった「なにか」の答え
を、明日に期待してもいた。

「さて、皆さん。皆さんが昨日感じたことを、もう一
度整理してみましよう」

三日目は、そんな武田の言葉から始まった。

「皆さんは、生まれてから今日までの人生で、さまざま

まな選択をしてきました。しかし、その選択はすべて正しかったのでしうか。もし、正しかったとしたら、昨日、過去のことをイメージした時、あれほど大きな叫びをあげる必要はなかったのではないでしうか。

人生の途上で、なにかを選択するということは、その他の可能性を切り捨てるということだす。無自覚なまま選択してきた結果、あなたにあったはずの豊かな可能性を切り捨ててきた。それが、今のあなたの姿なの

です。昨日最後にイメージしたように、それは、母の胎内での選択から始まっています。今、あなたを特徴づけている遺伝子の半分は、受胎以前に決まっています。一度の生殖で排卵される卵子は、基本的にひとつだからです。これには、選択の余地はありません。ところが遺伝子の残り半分、つまり、精子の持つ遺伝子については、たくさんの選択肢があつたはずです。今のあなたは、その時、卵子があるひとつの精子を選

扱した結果です。その論理を奇妙に感ずる方もいるはずです。卵子と精子の組み合わせは、卵子のところまでどの精子が一番早くたどりつくかで決まるのではないかと。確かにかつては、そう信じられてきました。しかし、最新の生物学では、同時に卵子までたどりつく精子はひとつだけではないことがわかっています。そして、卵子の中に入ろうとしても、卵子から頑として拒否される精子があることも。ある生物学者はこう

言っています。『卵子は、その意志によって、受け入れべき精子を選んでいるのだ』と。つまり、生まれる以前から、あなたは——正確にはあなたの半分は、もう半分を選択しているのです。その時、もしちがう選択をしていたら、今とはまったくちがったあなたがいるはずです。そんな姿をイメージし、その目から今のあなたを見つめ直すことで、あなた自身もつとよく見えてくるのではないでしょうか」

そこで武田はすこし間をとって、全員の顔を見渡した。

「今日、私は、皆さんにある実験を試してみること提案したいと思います。今日一日をまったく別人になって過ごしてみるのです。男は女に、女は男になることにします。なぜなら、人生における最初の選択、受胎時に、性もまた決定されるからです。イメージを持ちやすくするために、衣装を用意しました。今から、男

性は女装を、女性は男装をします」

会場にざわめきが起こった。それにかまわず、武田が有無を言わせぬ口調で言った。

「男性はここで、女性は隣の部屋に移動して、すぐに着替えてください」

女の受講者たちが出て行ったあと、残った男たち一人ひとりに紙袋が手渡された。その中を見ると、下着

も含め、女性用の衣類が入っていた。

「さあ、服を脱いで着替えてください」

武田が言った。

男たちは、みんな戸惑っていた。お互いの顔を見合
わせて、照れたような笑いを浮かべている。

「何をしているんです。時間がないんですよ」

強い調子で言った武田の言葉に、何人かが着ている
服を脱ぎ始めた。この二日の間に、武田の指示に従う

習慣が身につけてしまったのだろう。

幸一もその一人だったが、理由はまったくちがった。

（なんてばかばかしいことを。）

内心、そう思っていたが、初めて見えてきたエデンの真理教とのつながりを、早く確認したいという思いから、率先して脱いだのだ。

十五人の裸の男が、女の下着や服を身につけていく。何も知らない者が見たら、かなり醜悪な図だろう。し

かし、大真面目な顔で促す武田たちに、誰も文句を言えず、その作業をすすめた。

全員が服を着終わった頃、女たちとともに隣の部屋に行っていた里佳たち二人の女性アシスタントが帰ってきた。

幸一は、里佳にそんな姿を見られることは耐えられない気がしたが、無論、逃げ出すわけにもいかなかった。

「さあ、メイクをしますから、二列に並んでください」
里佳が言い、もう一人のアシスタントとともに化粧
道具をセットし始めた。

幸一は、迷った末に里佳の方の列についた。

里佳たちは、男たちに手際よくメイクし、いつのま
にか運び込まれたウィッグを選んでかぶせた。

「荒井さん、あなた、すごくきれいよ」

幸一の番がきて、メイクし終わると、里佳が言った。

自分ではそんなつもりはなかったのに、メイクされることに緊張していたのだろう。気がつくのと、いつの間にか椅子が並べ替えられ、鏡が置かれて、昨日のミラーダイアログの時と同じようにセットされていた。

メイクがすんだ男たちは、ためらいながらも、やがて椅子に座り、自分の姿を鏡に映しだした。

幸一も、それにつられるように椅子に腰掛けた。そして、思わず声をあげそうなほど驚いた。

里佳が言ったのは、嘘ではなかった。鏡の中にいたのは、確かに美人だった。ワンピースと同系色のルー・ジユが塗られた口を少しあけ、大きな瞳を見開いて、こちらを見つめていた。

身長一六三センチ。けっして大柄ではないし、体形も細身だ。しかし、自分が、これほど女装の似合う人間だなどとは、もちろん、一度も考えたことはなかった。里佳の化粧がうまいせいかもしれないが、それに

しても、部屋の中にいる他のメンバーの中で、幸一が一番の美人であることは確かだった。

幸一が呆然と鏡に見入っていると、隣の部屋から男装した女たちが引き上げてきた。ほとんどが背広にネクタイというスタイル。髪の毛の長いものは、後ろでまとめ、前から見るとオールバックに見えるようにしている。

「さあ、昨日、ミラーダイアログをしたパートナーを

探してください」

武田が言った。

そのあと起こったことは、簡単には信じられないよ
うなことだった。そしてそれは、その後幸一が経験す
る、数々の奇跡の、いわば序章だったのだ。

4 煩惱の回路

街路樹が、白く光る歩道の上に強いコントラストを描いて影を落としている。陽射しが強く、葉も繁ってきた証拠だろう。五月下旬の表参道は、すでに真夏の

ようだ。

相変わらずブルゾンなどはおり、大きなシヨルダ
ーバッグをさげた幸一は、なにか、自分が場違いな存
在のような気がした。

気分を変えるために、地下鉄に乗らず歩いたのだが、
逆効果だったようだ。

(……やっぱり俺は、どこかおかしくなってる。)

幸一は、さらに落ち込んでいく自分を感じていた。

「荒ちゃん、あんた、スランプか？」

先刻、「リベレーション」誌編集部で、編集長の伊神にそう言われた。

持ち込んだ記事を「面白くねえな」と突き返されたのだ。

こんなことは初めてだった。これまで、多少の表現上の手直しを要求されることはあったが、ネタそのものにはけちをつけられたことはない。それが、スキヤン

ダルライターとしての幸一の誇りだった。

ところがこのところ、そんな新鮮なネタに出会わなくなってしまうた。個人的に持っている情報収集のネットワークに、記事にする価値のある情報がひっかかってこなくなつたのだ。

：：いや、たぶん、そういうことではない。

情報は入ってきてても、その情報からスキャンダルの臭いを嗅ぎとる、幸一自身の嗅覚が鈍ってしまったてい

るのだ。

(やっぱり、スランプか……。)

幸一は歩道から顔をあげ、眩しそうに、原宿方面から歩いてくる人々を眺めた。

女子大生らしい数人のグループ。昼食をとりに出たらしいブティックのマヌカン。カフェテラスのテーブルに着く若い女……。すべて、ショートパンツだったり、ミニスカートだったり、ノースリーブだったりと

いう、肌を露出させた服を着ている。

季節を早く感じるのは、この街の、実際のシーズンよりも早いフアツションのせいでもあるのだらう。

（∴∴そうか。あの時のワンピースのデザインを夏物にすると、あんなふうになるんだ∴∴）

女子大生のうちの一人、ピンクのミニワンピースを着た女を見つめ、そんなことを考えていた自分に気づき、幸一は小さくかぶりを振った。

（ち、女を見る目まで変わっちゃった。）

じつは幸一には、自分がおかしくなっている原因が何なのか、わかっているのだ。

すべては、二か月前のあのセミナーのせいだった。

S R A のビギナーズセミナー三日目。

女装させられた幸一たち男性受講者と、同じように男装した女性受講者たちは、トレーナー武田の指示に

従って、それぞれの中からパートナーを探した。

前日、長時間ミラーダイアログをした相手なのに、お互いのなりが変わったせいで探すのに時間がかかった。幸一と近藤理恵子の組は特にそうだった。

たぶんそれは、幸一の変化が大きかったからだろう。相手を探し当てたカップルのほとんどは、顔を見るなり、女の方がぷつと吹きだしたのに対し、最後に残った幸一にやっと気づいた理恵子だけは、ちよつと驚い

たような表情をしたのだ。その驚きの意味が、滑稽さや不気味さでないことは、見つめられ、照れて目を伏せた幸一にもよくわかった。

「さあ、昨日のように、ミラーダイアログの体勢で座ってください」

武田が言った。

その言葉に全員が席に着いたが、場内のざわついた雰囲気はつづいていた。どの組も、女の方は笑いをこ

らえていたし、男は照れ笑いしていた。

「真面目に取り組んで。これはけっして遊びではないんです」

武田の険しい声が響いた。

場内のざわめきは、その声に潮が引くように消えた。

「顔をあげて、前を向いて」

幸一がどきまぎししながら顔を上げると、髪をオールバックふうにし、背広を着た理恵子は、まだ驚いたよ

うにこちらを見ていた。

理恵子の隣に置かれた姿見のような鏡には、椅子に座ったひとりの女が映し出されていた。その脚が開いているのに気づき、幸一は知らず知らずのうちに膝を閉じて、スカート裾を引き下げるような動作をしていった。

理恵子の視線が、その動作を追った。

鏡の中の女は、さらに恥ずかしそうに身を固くした。

幸一の気持ちは、この時点で、すでに完全にうわずっていた。

「さあ、目を閉じてください。まず、昨日のイメージメデイテーションのつづきをします」

武田が言った。

幸一は、恥ずかしさもあって、すぐ目を閉じた。

昨日と同じように、しばらくの時間をおいてから、武田の声が響いた。

「：：あなたは今、お母さんの胎内にいます：：」

昨日、最後に瞑想したシーンから、昨日とは逆に、つまり、成長していく過程をたどって、武田はイメージを誘導した。○歳、五歳、十歳、十五歳……。

ただし、昨日とは大きな違いがあった。今の自分とは逆の性になったつもりで、イメージするのだ。

「モデルは、今あなたの前にいるパートナーです。あなたは、目の前にいるもう一人のあなたとして育ちま

す。さあ、想像力を働かせて」

瞑想の途中、武田は何度もそう繰り返した。

（また、やつの催眠術にはまっている。）

心の片隅で確かにそう認識しながらも、どこか穏やかではいられない幸一的心情に、武田の声は無抵抗に届いた。

幸一は、少女時代を送る自分を思い描いていた。

：：ねえ、ママ。あたし、あのお人形がほしいの：

：。

：：大きくなったら、真っ白なウエディングドレスを着てお嫁さんになるのよ：：。

：：このお洋服、すてき：：。

：：あ、男の子たちが、こっちを見てるわ。あたしって、ちよつとはきれいなのもしれない：：。

：：もつと、髪をのばしたいな：：。

：：太りすぎちゃった。ダイエットしなくっちゃ：

：。

：：いつか、きっと、すてきな人があたしを迎えに
来てくれる：：。

「目を開けて」

イメージが、二十歳までたどり着いたとき、武田が
言った。

幸一が目を開けると、目の前に、自分と理恵子がい
た。

しかし、そう思ったのは間違いだった。いや、間違いではないのだが、一瞬、幸一は、男装した理恵子自分を自分だと思い、鏡の中の自分の姿を理恵子だと錯覚したのだ。

お互いの顔つきが先刻までとはさらに変わっていた。理恵子は、ふだんの幸一にそっくりな表情をしていたし、鏡の中の女は、理恵子の顔をしていた。

そういえば、お互いの着ている服も、昨日の相手の

装いに似ている。たぶん、わざと、そういう服を用意したのだ。

幸一が、そんなことを考えはじめた時――、

「雑念は捨てて。さっきのイメージを維持するのです」
武田の声が場内に響いた。

「そのイメージを持ったまま、今から、昨日のミラー
ダイアログを、立場を変えて繰り返します。昨日の相
手の言葉を思い出し、内容もしゃべり方も、できるだ

け忠実に再現してください。さあ、早く。時間がありません。昨日は、どちらから話し始めましたか？」

考える余裕を与えないような口調で、武田は言った。ちよつと当惑気味だった受講者たちは、その口調に乗せられるように、話し始めた。

「では、……僕から」

理恵子が言った。

「……はい」

幸一が答えた。

「……お恥ずかしい話ですが、僕は、二年ほど前に、女房に逃げられましたね……」

理恵子は、昨日幸一が話したことをほぼ忠実に繰り返した。そして、その口調は、幸一の特徴をよくとらえていた。言葉はていねいでも、どこか冷やややかで、虚勢を張っているような話しぶり。身元がばれるのを恐れ、どこか本心を隠しているようなしやべり方さえ、

真似ていた。そんなことを理恵子が知るわけではないのだから、それは、理恵子の観察が鋭かった結果だろう。

「……奥様を、本当に、愛してらしたんですか？」

幸一になった理恵子の話がとぎれたところで、理恵子になった幸一がきいた。昨日、理恵子は、たしか、そこでそんな質問をしたのだ。

「愛？ そんなこと、あんまり考えたことないなあ：

」

理恵子は、どこか人を小馬鹿にしたような口振りで答えた。

話が進む間、武田は、昨日と同様に、「できるだけ大きな声で」と指示した。そのせいで、やはり昨日と同様に、告白は芝居じみたものになっていった。実際、今日は演じているのだから、なおさらだった。

理恵子は、ときおり自分が映った鏡に目をやり、女っぽい仕草が出そうになるのを修正した。見ていても、

だんだん、その「芝居」にのめり込んでいくのがわかった。先刻のイメージメデイテーションのせいで、感情移入がじゆうぶんに行きわたっているからだだろうか。

理恵子のしゃべりが終わり、幸一の番になった。

「あたし、恋愛に期待するものが大きすぎるのかしら。どうも、男の人との関係がうまくいかないんです……」

幸一は、自分の口から女言葉がすんなり出たのに、驚いた。

「もう二五ですから、もちろんこれまで何人もの方とおつきあいしたんです。でも、たいてい、最後は、あたしが結婚の話を持ち出して、それで、気まずくなつて……」

理恵子がしゃべりつづけていた。いや、理恵子ではなく、しゃべっているのは自分なのだが、幸一の目の前に見えるのは、昨日と同じように話す理恵子なのだ。そして、その隣に、それを聞いている自分がある。

（おや？）と、幸一は思った。

鏡の中の理恵子の頬を大粒の涙が一粒つつた。そして、それに気づいた瞬間、幸一はしやくりあげていた。

話しながら、幸一は自然に泣いていた。昨日の理恵子と同じように……。

（あたしは、なんてかわいそうな女なの……）

幸一の心の中の大半の部分を、そんな感情が占めて

いた。涙は、そこから自然に湧き出てきた。

そして、心の中の残されたほんの一部。そこに、やっと踏みとどまって、成りゆきを観察している本来の幸一がいた。ところが、その幸一自身にも、冷静ではいられない事情があつた。

先刻から気づいていたのだが、ワンピースのスカートに隠された自分の体の一部が、大きく変化しているのだ。自分の心の中に芽生えた「理恵子」の感情の昂

ぶりに影響されているのか、それとも、鏡の中の理恵子——つまり、自分自身に欲情しているのか……。

いずれにしても、幸一は、完全に自分を見失っていた。

「もうひととおり、告白はすんだようですね」

武田がそう言ったときには、幸一は理恵子になりきっていた。

「それでは、パートナーに、あなたなりの考えでアド

バイスしてあげてください。手厳しい批判でもかまいません。相手の話を聞いて、思ったとおりのことを言ってください」

幸一だけではなく、セミナー参加者のほとんどが、昨日はなかったその武田の言葉を、今自分が演じている性の立場で聞いたようだ。つまり、パートナーの立場から、自分自身を批判することをすんなり受け入れていた。

「君は要するに、自意識が強すぎるんだな。被害者意識に凝り固まっている。本当は、そんな態度が男を遠ざけているのに、それに気づいていない……」

幸一になった理恵子が言った。

「あなたは、奥様のことをセックスの対象としてしか見ていなかったんだわ。ひとりの人間としては考えていない……」

理恵子になった幸一が言った。

「はい、そこまで」

武田が、大きな音で手をたたいた。

その瞬間、参加者たちは、まるで夢から覚めたような表情をし、そして、今自分がしゃべったことに、あらためて気づき、驚いた顔に変わった。

そこで、前日と同様遅い昼食になり、午後、武田は最後のレクチャーをした。

食事の間も、その後も、参加者たちの服装はそのま

まだだった。そのせいか、男たちは女っぽい仕草で、女たちは男っぽい仕草で、食事し、講義を聴いた。いや、なによりも、みんな、先刻の感情の昂揚を引きずっていたのだろう。

武田の最後の講義は、おおよそこんな内容だった。

このセミナーで実証されたことは二つある。一つは、現在の自分も、立場を変えてみるとその弱点がよく見えてくるということ。そして、そんな視点を持つこと

は、けっしてむずかしいことではないということ。二つ目に、もっと大事なものは、自分は、これまでの人生の中で、さまざまな可能性を切り捨ててきたのだという。そして、その可能性の多くは今からでも取り返すことができるということ。

「生まれる以前の選択である、性すら乗り越えることができたのですから」

武田は、講義をそう結んだ。

原宿から山手線に乗り、目黒で私鉄に乗り換えて、幸一は自宅へ向かった。

途中、恵比寿で降りようかと迷った。

例のセミナーの主催者、S R Aの東京本部に立ち寄り、自分のところに何の連絡もないのはなぜなのかを聞いてみようかと思ったのだ。しかし、なぜだか、幸一はそれをためらった。

セミナーが終わる時、武田はこんなことを言っていた。

「SRAのセミナーは、このビギナーズセミナーがすべてではありません。このあと、何段階かのアドバンスセミナーが用意されています。いずれ、みなさんのもとにもご案内することになると思います」

ところが、あのセミナーが終わってから二ヶ月近く、SRAからはなんの音沙汰もないのだ。

S R Aとそのバックにあるらしい新興宗教団体「エデンの真理教団」の実体を探ろうしている幸一は、当然、その後も、他の仕事の合間に取材をつづけている。じつは、あのセミナーの間に何人かの参加者から連絡先を聞き出していて、その後、会ってもいる。

彼らのところには、セミナーの二三週間後に、アドバンスセミナーとやらの案内があつたそうだ。そして、そのうちのひとりには、すでにそれに参加もしていた。

「ビギナーズセミナーの内容を、さらに濃くしたものでしたよ」と、その男は言っていた。

それなのに、幸一のところには、いつさいの誘いが無いのだ。

そのせいもあり、幸一の取材は暗礁に乗り上げていた。S R Aとエデンの真理教団のガードが堅く、周辺を探っても何の手がかりも出てこないことも、相変わらずだった。

例の女——同じころ取材を始めた桜井睦美の消息も、その後、聞かない。

このネタを追うのに行きづまっていることが、まちがいなく幸一のスランプの原因のひとつだ。

しかし、もちろん、それだけのことではない。それなら、S R Aの本部に行くのに、そんなにためらうこともないのだから。

自宅のマンションに戻り、シャワーを浴びた幸一は、トランクスひとつの裸のまま、ベッドの上に身を投げ出していた。べつになにをするのでもない。ただ、天井を見つめているのだ。

この頃、こんなふうに時間を漫然と過ごすことが多くなった。以前には考えられなかったことだが、積極的になにかをしようという気にならないのだ。

いや、本当のところを言えば、「なにか」をしそう

でこわいからだった。

幸一は、ちよつと寝返りを打ち、横を向いた。

その部屋は幸一の居室兼仕事部屋だ。ベッドのそばの窓際に机があり、その上に仕事道具のワープロがのっている。そして、その向こうの棚には、安物のボストンバッグがひとつ置いてあつた。

それは、死んだ宮原の遺品だ。中には、一冊の聖書とともに、宮原が使っていたらしい女性下着とワンピース

ースが入っている。

宮原がなぜ女装などしていたのか。彼が自殺した時には、さっぱりわからなかった。しかし今、幸一は、その気持ち少しだけ理解できるような気がしている。そして、そんな自分の変化がこわかった。

だいいち幸一は、なにより、そのボストンバッグの中のものに気がなくなって仕方がないのだ。そして、さらに、その壁の向こうにある部屋が。

2DKのそのマンションの、今はほとんど使っていないもう一つの部屋には、二年前に家出した妻、冴子の衣類が置かれている。化粧道具や鏡台もそのままになっっている。つまり、手を伸ばせばすぐそこに、その「なにか」はあるのだ。

あのセミナーが、けっきよくは、三日目の女装と男装という奇妙なプログラムに向かって仕組まれていたことは、明らかだ。今思えば、ミラーダイアログだと

かイメージメデイーションだとかが出てこない一日目から、妙に演劇がかったプログラムが組まれていた。自分はその仕掛けと、武田の巧妙さに、まんまとのせられただけだ。

そうは思った。だが、それでも、幸一は、あの鏡の中の理恵子——いや、あの「女」は、本物の理恵子などよりずっと美人だった——をもう一度見てみたいと思っっているのだ。

こうして、裸のままであるのも、すぐにでも、隣の部屋に行って、冴子の下着を身につけ、化粧をしたいという気持ちの表れなのかもしれない。それを押し止めているのは、宮原の無惨な死と、幸一の理性だけなのだ。

幸一が、その実体を早く知りたいたいと思いながら、S R Aに近づくことに、どこかブレーキをかけているよ
うなのは、おそらく、そのせいだ。そして、S R Aか

らの連絡がこないことにイライラしているのも、たぶん、そのせいなのだ。

幸一が、そんな自分の悶々を振り払うように、もう一度寝返りを打った時、電話が鳴った。

「もしもし、わたくし、S R Aの宮内ともうしますが……」

S R Aのアシスタントトレーナーで、幸一が最初に会ったときから惹かれていた里佳だった。

「あ、はい。荒井ですが」

「あの、次のレベルのセミナーの予定が決まりましたので、すぐにでもお会いしたいのですが……」

幸一は、その言葉に、なぜか動悸が激しくなっているのを感じた。

しかし、里佳と会ったとたん、幸一は、女装したいなどと思った自分は、やはりどうかしていたのだと感

じた。

(抱きたい。)

いつもそうだが、里佳と会うと、幸一の体の中から、そんな欲情が突き上げる。

(俺は、やはり男なのだ。)

清楚でありながら男をそそるようなその顔を見ながら、幸一はそう思った。

里佳は、「急な話で、わざわざお呼びつけするのも

申し訳ないので」と、自分の方からやって来た。それで、マンション近くの喫茶店で落ち合った。

「じつは、荒井さんへの次の段階のお誘いが遅くなつたのには、いくつかの理由がありましたのよ」

里佳は、そんな話から切り出した。

「ひとつには、どちらのコースを受けていたただくのか、内部で検討していただきましたの」

「コース？」

里佳を見つめながら、幸一が聞くと、ほほえみ返しながら里佳は答えた。

「ええ。じつは、ビギナーズセミナーの席では公表しないのですが、わたくしどものセミナーには、通常のアドバンスコース以外に、トレーナーズコースというのがあるんです」

「トレーナー……というと、あなたみたいなの」

「ええ、わたくしにもトレーナーズコースを受けました」

「ほう、……それを、僕に？」

「はい、わたくしどもで検討して、その資格のあると思われる方には、そちらをお受けいただくことになっているんですの」

「資格……と言いますと？」

「それは、おいおいわかってくると思います」

里佳は、そう言って、どこか神秘的な感じのする笑みを浮かべた。幸一は、その「資格」というのを、も

う少しつつこんで聞きたかったが、里佳の表情について見入ってしまった。

「じつは、トレーナーズコースをお受けいただくには、いろいろと審査がありますの。それで、失礼だとは思ったのですが、荒井さんのことをいろいろと調べさせていただきました」

幸一は、どきりとした。べつに何のガードをしていたわけでもないから、幸一の身元など、調べられれば

すぐにバレてしまう。幸一の、その困惑にかぶせるように、里佳は言った。

「荒井さん、うそをついていらっしやいましたわね」

「え：：ええ」

幸一は素直に認めた。今さら、言いつのつても仕方がないと思ったからだ。

「確かに僕は、写真週刊誌のライターです。SRAに申し込んだのも、取材が目的です」

「ええ、それは、わたくしどもの調査でもわかりました」

「それで、僕は、そのトレーナーズセミナーとやらに、出る資格がなくなつたというわけですね」

「いえ、たしかに内部には反対意見もありました。こんなに時間がかつたのも、そのせいです。でも、わたくしどもの組織の最高幹部からの指示で、お受けいただくことになつたんです」

「最高幹部？……武田さんですか？」

「いえ、もつとずつと……」

もつとずつと上からの指示、ということだろう。幸一は、先刻から心に浮かんでいた考えを、思い切って里佳にぶつけてみようと思った。

「もしかすると、そのトレーナーズセミナーというのは、SRAではなく、エデンの……」

幸一が、そこまで言ったとき、里佳は、口の前に人

差し指を立てた。

「そのお話は、ここではできません。よかったら、あなたのお部屋へ行ってお話ししたいわ」

キッチンで二人分の紅茶を煎れながら、幸一は考えをめぐらせていた。

SRAをもっと探っていかなければ見えてこないと思っていたエデンの真理教が、いきなり向こうから姿

を現してきたのだ。これは明らかにチャンスだ。しかし、里佳の誘いに素直にはのれないなにかがあるのも事実だった。

あれだけガードの堅いエデンの真理教が、幸一をスキャンダルライターだと知った上で、誘ってきているのだ。しかも、里佳の言ったことを信じるなら、それは最高幹部からの指示らしい。これは、なにかの罠かもしれない。そして、その先には、宮原のような末路

が待っているのかもしれないのだ。

これが、暴力団とか政治団体とかだったら、幸一はたぶん、相手の誘いに、迷わず飛び込んで行くだろう。そもそも、そんな無鉄砲さが売り物のライターなのだ。

しかし、相手は得体の知れない宗教団体だ。

しかも、幸一の中には、セミナーでの「あの出来事」に心惹かれている自分がある……。 「女装教」だと思われるエデンの真理教に、のめり込んでいったりはし

ないだろうか……。それがなにより、幸一を迷わせていた。

「それで、いかがかしら？ トレーナーズセミナーに出ただけのかしら？」

紅茶を持って自分の部屋に入ると、一脚だけある横長のソファに腰掛けていた里佳が言った。

「まだ、さっきの質問に答えてもらってないけど」

幸一は、紅茶を里佳の前に置くと、自分は、ベッド

に腰掛けた。

「ええ、あなたのおっしやるとおりよ。SRAのトレーナーたちは、みんなエデンの真理の信者。トレーナーズセミナーも、本当の名前は、エデンの真理教修練会っていろいろの」

「で、さっき言ってた、反対があっても入れようという、俺にある資格とは？」

「ふふ、あなたには、そういう素質があるってことよ」

この部屋に入ってから、幸一も里佳も、先刻とは言葉づかいが変わっていた。話が核心に触れていることもあったが、閉め切った部屋に二人だけというシチュエーションにも、微妙に左右されていた。

「素質？　　どういうことだ？」

「ひとことでは言えないわ。ビギナーズセミナーでのあなたの様子を分析した結果なの。どうかしら？　　教団の修練会に出てみない？」

「ことわる」

幸一は言った。先刻の困惑とはべつに、幸一には、里佳を困らせてやりたいという気持ち湧いてきた。

困らせた結果、里佳がどう出るか……。さっきからの里佳の様子を見ていて、幸一には予感のようなものがあつたのだ。

「なぜ？　あなたは教団の秘密を探りたいんでしょ」

里佳はそう言って、ソファを立ち、幸一の傍らまで

来て、その肩に手をかけた。

瞬間、幸一はその手首を握り、自分の方に引き寄せた。

「あ、だめ……」

里佳はよろけて、幸一の膝に倒れかかった。幸一は、そのまま里佳を抱き、ベッドの上に押しつけた。

「そんな……だめよ」

「お前だって、その気で近づいてきたくせに」

幸一はそう言つて、里佳にのしかかり、首筋に唇をはわせた。

「やめて。いけないわ」

里佳は抵抗しつづけたが、それは、幸一の劣情をさらに誘うために、あえてそうしているようでもあった。

幸一は、里佳の顔や首筋を唇でむさぼりながら、ワンピースを脱がせていった。それを足から引き抜くと、白いスリップのストラップをはずし、ずり下げた。さ

ほど大きくはないが、ピンク色の乳首をつけた形のように乳房が現れた。

「あー、だめだったら……」

軽いウェーブのかかった長い髪がベッドの上で乱れ、その様子は、さらに幸一をそそった。

幸一は、スリッパを腰まで下げると、今度はショーツといっしょにして、それを足にかけて引き下ろした。

全裸に剥かれた里佳は、おびえたまなざしで幸一を

見上げていた。

「お願い、許して……」

その表情に、幸一の「男」はもう限界に達していた。これ以上の前戯は必要なかった。

幸一は、その手を、里佳の内腿の合わせ目にはわせた。そして……

「……え！」

幸一の手の中には、女にはあらざるものがあつた。

「……そう。あたし……男……」

驚いて見つめた幸一に対して、里佳は、羞恥の表情で言った。

幸一は、恐ろしいものでも見るように腰を浮かせた。

「だめ。女に恥をかかせないで」

里佳は、さつきとはまるで逆のことを言い、幸一に抱きついた。そして、両脚を開いて高くさしあげると、一方の手で幸一のものを持ち、巧みに後ろの秘部に導

いた。

その時、里佳の表情は、さらに蟲惑的こわくなものに変わった。

限界まで高まり、いったんときれた幸一の昂ぶりも、その表情の前に、また燃え上がっていた。

「あー」

幸一のもが入ると、里佳はかすれた声を出した。

もはや幸一は、自分自身をも押し止められなくなっ

ていた。

激しく腰を前後する幸一に、里佳は全身で悶えた。

その悶えは、幸一がこれまで相手にしてきたどの女より淫靡で、そして美しかった。幸一は、そんな里佳の表情を見つめながら、絶えた。

「あっ、あー」

二人の体が、ベッドの中にぐったりと沈んだ。

里佳は、幸一の胸の下で大きく息を吐いた。

幸一はふたたび上体を持ち上げ、そんな里佳を不可解そうな顔で見おろしていた。

「……んふ」

里佳が、ちよつと恥ずかしげに笑った。それもまた、ことが終わった後の女の表情としては、この上もなく魅力的だった。

「あなたが、今、思っていることを当ててあげましようか」

里佳が言った。

「あなたは、今、あたしのことをうらやましいと思っている。ちがう？」

幸一には、思いもかけない言葉だった。しかし、今、幸一が感じている感情は、たしかに、そういうことなのかもしれない。なかった。

「ほら、あなたには、素質があるのよ」

幸一の胸にそっと触れながら、里佳が言った。

5 聖約の異境

「その後、彼女からはなんの連絡もありませんか？」
「あんたのところにはないものが、わしのところにあるわけがあるまい」

ヨーロッパ調のアンチックな調度で整えられたその薄暗い洋間で、関根林蔵は、幸一の質問に木で鼻をくくったような答えを返した。幸一に対するその態度は、二年半前、初めてここを訪れた時と少しも変わってはいない。

「いや、冴子はおそらく僕に愛想をつかして出ていったんです。それから二年半。何も言っていないということ、もう僕のところに戻る気はないということ、

しよう。しかし、あなたは冴子の育ての親だ。今となつては、僕などよりあなたのところの方が、冴子が連絡してくる可能性は高いと思います」

「育ての親か……ふふ」

その鈍く輝く黒檀の書斎机と、まるで一体化してしまつたような林蔵は、幸一の言葉に自嘲的に笑つた。

「あれに愛想をつかされたのは、あんたよりわしの方が先じゃよ。冴子が十歳の時、両親、つまりわしの甥

夫婦が事故で死んで以来、引き取って育てたのはたしかにわしじや。じやが、わしにはおそらく、冴子の気持ちちがわかつてはおらんかったのじや。いや、わしはわしなりにあれの幸福を考えてはおった。たったひとりの身内じやからな。いつかはわしの財産をまかせられる男をさがして、幸福な結婚をさせてやろうと思うておった。じやから、わしは、あれに子供の頃から貞淑な女としての教育をしたつもりじや。高校から外国

のミツシヨンスクールへやったのも、そのためじゃ。
しかし、わしはどうやら、あれがほんとうに欲してい
たものを与えてはやれなかったようじゃ。あれには、
わしは愛情のひとつかけらもないごうつくじじいに見え
たはずじゃよ。それに気づいたのは、二十歳の時あれ
が出て行ってからじゃった。しかし、愛情を求めて家
出した冴子がめぐり会ったのが、けつきよくあんだの
ような男じゃったとは、皮肉なもんじゃな」

幸一に対する敵意は変わってはいなかったが、林蔵は二年半前よりずっと弱気になっているようだった。

体が弱ってきているのかもしれない。もう八十を越えているはずだ。いくら山林王などと呼ばれている人物でも、寄る年波には勝てないのだろう。

「ところで、あんたはなぜ今頃になって、またわしのところに来る気になった。冴子のことなど、とうに忘れておっただらうに」

「いえ、こちらにちよつと所用がありましたね」

「ふふ、どうせ新しい女でもつくつて、冴子の籍を抜く必要でもできたのじゃろう。警察へ搜索願を出すのもめんどろがる男が、今さらあわててもはじまるまい」

幸一の前で思わず弱音めいたことを言ってしまったことが悔しかったのだらう。最後に林蔵は、葉巻にむせて咳き込みながら、そんなふうに言った。

森に囲まれた関根邸を出ると、蟬の聲が押し寄せるように幸一をとりまいた。幸一は、門までの長い道を歩きながら、もう一度今出てきた洋館を振り返った。

二年半前、失踪した冴子の戸籍を頼りに、初めてここを訪ねた時は少なからず驚いたものだ。

単なる家出娘だと思っていた冴子が、こんな大資産家の養女だったとは考えてもみななかったからだ。

冴子は、入籍してからあとも、自分の身寄りの話は

しようとしなかつたし、そんなことはどうでもいいと
考えていた幸一も聞こうとはしなかつた。育ちは悪く
ないように感じていたが、どうせ自分と同じ、地方の
中産階級のはぐれものだからに考えていたのだ。

幸一と冴子が出合ったのは、今から六年前、幸一が
二一歳、冴子が二十歳の時だ。東京の貧乏アパートの
隣の部屋に越してきた冴子を、幸一がいきなり力づく
でもものにしてしまったという、いわばレイプまがいの

出会いだった。

当時幸一は、大学を中退し、政治ゴロとか経済ゴロとか呼ばれる連中が、政財界への脅しの道具として出している暴露新聞のアルバイトライターをしていた。

もちろん、ジャーナリズムなどと言うにはほど遠い、ヤクザな仕事だ。幸一は、いつか、そこでつかんだネタをもとに、もつとメジャーな舞台で仕事をしたいという野心を持っていたのだ。

当然、今以上にエネルギーギツシユだったし、また、皆さんでもいた。冴子は、そんな幸一の鬱屈したエネルギーのいわばはけ口だった。

ヤクザまがいの経営者の指示で、何日間も政治家の女のマンションに張り込むといった虚しい取材をしたあと、アパートに帰ると、幸一は冴子を抱いた。

冴子は、最初の時こそ抵抗したが、一度抱かれてからは、幸一に従順になった。幸一がいる時は、幸一の

部屋で過ごし、食事や洗濯などあれこれの世話もしてくれた。なにを考えているのかわからないようなところにはあったが、女を抱く金もなかった幸一にとっては、都合のいい女だったのだ。

幸一が、「リベレーション」誌に記事を持ち込み、それが採用され、さらに専属のライターとして登用されたころ、幸一は冴子に「籍を入れようか」と言った。べつに結婚などどうでもよかったが、けっこう美人で、

しかも自分の思い通りになり、自分のことをいっさい
じやましないこんな女とだったら、一生いっしょにい
てもいいと思っただのだ。こんな女は、いまどき、そう
そう見つかるものではないということは、幸一にもよ
くわかっていた。

幸一がそう言った時、冴子は、たった一度だけ、こ
れまでに見せたことがないほどうれしそうな顔をし
た。

幸一は結婚届にサインしただけで、入籍の手続きはすべて冴子がした。

しかし、「リベレーション」誌で幸一がスキヤンダ
ルライターとしての頭角を現し、収入が増え、2LD
Kのマンションに移ってからも、ふたりの関係がそん
なに变化したわけではない。幸一はあいかわらず、冴
子にはなにも言わずに仕事で何日も家をあけ、たまに
帰宅すると、冴子をむさぼるように抱いた。夫婦と言

つても、それだけの関係だったのだ。

幸一は当時、冴子が文句ひとつ言わず自分に従うのは、自分に——もつと端的に言えば自分のセックスに——、惚れぬいているからだろうと思っていた。しかし今思えば、彼女は、最初に身をまかせた男に——幸一が犯した時、まちがいなく冴子は処女だった——、一生をつくすのが女の義務だと信じ切っていたのだらう。

それがわかったのは、結婚して二年後、冴子が突然なんの前ぶれもなく家出し、いくらなんでも放ってはおけなくなつた幸一が、初めて関根邸を訪ね、林蔵から冴子の経歴を聞かされた時だ。

冴子はクリスチャンだった。それは、同棲した当時から知っていた。しかし、まさかその信仰を培つたのが、アメリカ中南部の今時あまりないほど厳格な修道院ふうミッションスクールでだった、などとは思ひも

およばなかつた。

おそらく冴子は、清貧と貞淑な女であることを第一義とするその信仰を強固に持って日本に帰り、関根林蔵のよき娘であろうとし、しかし、林蔵の俗物性に幻滅してそこを逃げ出し、さらに、幸一のよき妻であろうとして、幸一にも幻滅し、二度目の家出をしたのだから。

時代錯誤だと言ってしまったえばそれまでだが、冴子の

抱え込んだ矛盾が大きなものだっただろうことは、それなりに理解はできる。

そして、冴子をそんなところに追い込んだのは、林蔵の時代錯誤であることもまたまちがいはなかった。

関根邸の門の外に待たせておいたタクシーに乗り込みながら、幸一はもう一度、その森の中の屋敷を振り返った。

「関根様のお屋敷に用事やなんて、大手商社の林業関

係の方ですか？」

タクシーの運転手は、発進しながら、そう聞いてきた。

「まあ、そんなところです」

幸一は面倒なので、そう答えた。

三重県 尾鷲市^{おわせ}にある関根邸を訪ねたのは、エデンの真理教の「修練会」に向かうついでだった。その修

練教会が、三重の山中にあるから、そこに出向いてほしいと宮内里佳に言われたのだ。

女だとばかり思っただけ抱いた里佳が、じつは男だった。その衝撃的事実に呆然としているところに、里佳は「あなたも本心では、あたしのようになりたいと思っ
ているんでしょ」と言った。

「ばかな」

幸一は言下に否定したが、一方で、ここ二ヶ月間の

自分の不安定な精神状態が、その言葉に集約されていくような気もした。

「とにかくあなたは、まちがはなくエデンの真理の教義を理解できる資質を持っているのよ。そんなふうに偽りの姿で暮らしているのはもったいないわ」

里佳は、幸一のベッドの上で、下着をつけながら言った。その姿は、どう見ても、女——それも、事後の満ち足りた女にしか見えなかった。

「行けるようになっていたら、連絡してくださいませね」
身繕いし、またていねいな言葉づかいに戻った里佳
は、そう言って帰っていった。

そのあと、幸一は、数日間迷った。

これ以上、エデンの真理に深入りしない方がいいよ
うに思えた。深入りすれば、自分も里佳のようになって
てしまう気がした。たしかに里佳の言うとおり、自分
の中には、それに惹かれる心情があるのだ。ずるずる

と引き込まれていく可能性は、皆無ではない。

自分はあくまで男である。里佳のようにはなりたくない。理性の部分は、そう言っていた。

しかし、以前だったら、エデンの真理を警戒するのは「死んだ宮原のようになりたくない」からだった。

それが「里佳のようになりたくない」と変わったぶんだけ、幸一の心は動いていた。自分は里佳のような美女になれるかと思っっているのだ。そんな自分を見てみた

いという気持ちだが、理性ではない部分で、むくむくとわきあがっているのだ。

そしてもうひとつ、幸一には大義名分があった。取材だ。

エデンの真理を追ってきて、やっとその正体が見えた。ここで手を引くのは、スキャンダルライターとしての名折れである。向こうは、幸一の正体を知った上で誘ってきているのだ。これに乗らないで、みすみす引

き下がれば、一生後悔することになるかもしれない。

それが、幸一の言い訳になった。

数日後、幸一は、「リベレーション」誌編集部に「休養するためしばらく旅に出る」と告げ、里佳に承諾の電話を入れた。

「このへんもみんな、関根の殿さんの山やでね」

久しぶりの長距離の客に上機嫌なのだろう。杉林の

中の山道を器用にハンドリングしながら、まるで自慢でもするのように、タクシートの運転手は言った。

尾鷲市から海山町みやまを通り、山を越えて宮川村に入る。

東京で地図を見たときには、せいぜい二十キロくらいの道のりだから、そう大したこともないだろうと思っていた。ところが実際に来てみると、その道は、深い山の中を曲がりくねり、走行距離は二倍くらいには

なりそうだ。

その上、道のあちこちに土砂崩れの跡があり、狭い道をさらに狭くしていた。そのせいで、タクシーはあまりスピードを出せない。

考えていたのより二時間近くも遅れて、宮川ダム上流の指定された場所——そこには川に架かる鉄製の吊り橋があった——に着くと、運転手が心配そうに聞いた。

「ほんとにこんなところでええんかね。このあたりには何もなければやけど」

「ああ、ここに迎えが来ることになってるから」

幸一が金を渡し降りたあともしばらく、運転手は発進せず、車外の幸一を見ていた。幸一が自殺でもするのではないかと思ったのだろう。

しかし、幸一が見返すと、そそくさとギアを入れた。

今日は珍しく何万円もの身入りがあったのだ。これ以

上変なことに関わらず、早く帰ろう。そんな表情だった。

幸一は、杉が植林されているわりには切り立った山と、その谷間に流れる清流を眺めながら時間をつぶした。もっと早く着けば、少し下流まで下り、ダムのあるあたりから逆に歩いて登って来ようと思っていたのだ。

宮川ダムのあるこの大杉谷は、日本で最も降雨量の多いことで有名な土地である。夏の一日で、東京の一

年分の雨が降ることもあるという。

さっきまで晴れていたのに、あつという間に山肌に霧が立ちこめはじめた景色を見ながら、幸一は旅行ガイドブックにあったそんな記述を思い出した。

幸一は腕時計に目をやってから、鞆から地図を取り出し、もう一度今いる場所を確認した。里佳は、たしかにここで待てと言っていたはずだ。

雨が降り出す前に、迎えが来ればいいが……。

幸一が本気で心配しはじめたころ、吊り橋のワイヤーがぎしぎしと音を立てた。見ると、やっと一台が通れるその橋を、ジープが渡って来た。

そのジープは橋を渡り終わると、橋と林道でできた狭いT字路を器用に使って方向転換し、バックで幸一の前に横付けした。

「乗りな」

助手席のドアを内側から開けた運転手が言った。

言われて、ステップに足をかけたところで、幸一は、運転手の顔を見つめて、動きを止めた。

「どうかしたのか？」

日焼けした顔の運転手が聞いた。ジーンズにウエスタンシャツを着ている。

「……いや」

その顔にどこかで見覚えがあったのだが、運転手にぎよろりと見返され、幸一は首を振り、助手席に乗り

込んだ。

車は、ふたたび吊り橋を渡り、川沿いの道を上流に向かった。

三重と奈良と和歌山にまたがるこのあたりの山系を大台ヶ原という。この自動車道は途中で行き止まりだったと思うが、たしか、この先の登山道を五・六時間も登れば奈良県境に行けるはずだ。

そのぶつきらばうな感じの運転手が無言でハンドル

を握っているの、幸一はフロントガラスの景色を眺めながら、そんなことを考えていた。

と、運転手がのどの奥の方で押し殺したような笑い声を立てた気がした。

「……ん？」

幸一が見ると、運転手は、今度はこらえきれないというように笑い出した。

「……なんだ？」

馬鹿にされた気がして幸一がにらむと、運転手はさらに大声で笑いながら言った。

「あんた、僕が誰だかわからんのか？」

「……え？」

幸一は、不躰に笑いつづけるその男の横顔に見入った。日に焼けた精悍な顔つき。面影は、たしかに記憶にあるのだが、どうしても思い出せない。

その記憶をなんとかたぐり寄せようとしていると

き、それとはべつに、幸一は前にもこんな経験をしたことを不意に思い出した。

あれは……、そう、女になった宮原を新宿で目撃したときだ。顔つきには記憶があつたのだが、その体つきや様相があまりに変わっていたために、見当もつかなかった……あの時と同じ感覚だった。

ということは、この男は……。

「……え！」

幸一が思わず声をあげると、男は、にやりと笑って、顔を半分こちらに向け、整髪料で固めていた前髪をおろしてみせた。

「……桜井……睦美」

「そうだよ。今は睦雄と名乗ってるがね」

男——いや、睦美は、ふたたび髪の毛を掻き上げ前方の道路に目を戻した。

まだ、口のはしに笑みをたたえているところをみる

と、幸一が自分の正体に気がつかなかったことがよほどおかしいらしい。いや、それがうれしかったというようにも見える。

幸一は、信じられない面もちで睦美の全身を見た。

顔は痩せ、以前の丸みが消えている。反対に、肩や腕は太くなり、体全体がふたまわりは大きくなった感じがする。ただ太ったのではない。筋肉がついているのだ。首や手首の細さなど、よく見れば、女としての

痕跡が残っていないが、全体から受ける印象は、男——それも鍛え抜いた男だった。

「あんたも、やつとここへだどり着いたってわけだ」
睦美が言った。声も、以前よりずっと低い。

睦美と以前会ってから——その時、ふたりはベッドで体を交わし合ったのだ——、まだ三ヶ月しかたっていないはずだ。たしかに身長は幸一と同じくらいあったが、あの時、睦美はまちがいなく女の体をしていた。

たった三月の間に、人間はここまで変化できるものだろうか。

幸一が呆然としたまま、そう思っていると、それがわかったかのように、睦美が言った。

「すべては信仰の力さ。僕があんたと、こんなふうにならなければならぬ。主の思し召しだと言ってもいい」

睦美は、車を止め、今度はまじめな顔でそう言うのと、ハンドブレーキを引いて、いったん車外に出た。

見ると、山側に、宮川に注ぐ小さな支流があり、その脇に舗装されてはいるがさらに狭い道がつづいていた。その入り口に低い木戸が造つてあるところをみると、おそらくは私道だろう。

車を降りた睦美は、その木戸を開け、ふたたび乗り込んで車の中に入れると、もう一度降りて木戸を閉めた。

底の砂粒までが見える清流沿いに、ジープはゆつく

りと上がっていった。

「あんた、そんなになつてまで取材をつづけるほど、このエデンの真理にニュースバリューがあると思つてるのか？」

やつとある程度気持ちの落ちついた幸一が聞いた。

「取材？」

睦美が答えた。

「たしかに、ここに潜り込んだときまでは、まだそん

なことを思ってた。だが、僕はここで生まれ変わったんだ。女だということに劣等感を持って、強がって下卑たことばかりやっていた過去の僕は、ここで死んだ。そして、主の思し召しどおり、ほんとうの僕として生まれ変わったのさ」

「つまり、みいらとりがみいらってやつだな」

「ふふ、あんたにももうじきわかるさ。神と教主様の偉大さがね。早く、女になったあんたが見たいものだ

な」

睦美がそう言ったとき、ジープは杉林を抜けた。

そこはうつそうと茂る杉の森の一部を切り取ったような空き地だった。山が急なぶん土地は傾斜していたが、その斜面をうまく利用した形で、階段状の建物が建っていた。見上げると、下から上まで五層あるようだ。

「降りな」

睦美はまた、ぶっきらぼうにそう言った。

幸一が連れて行かれたのは、建物の最下層にある礼拝堂だった。

百人くらいは座れるだろうか。つくりつけの椅子が並び、その中央に通路があつて、正面には祭壇があつた。そして、その背後には、架刑のキリスト像がある。ちよつと見には、普通のキリスト教会という感じだ。

幸一が入ってきた時、すでに若い男ひとりと女がふたり、礼拝席の最前列に座っていた。三人は、幸一の顔をちらりと見て、またふさぎ込んだように目を床に落とした。三人ともこの物々しい雰囲気気圧され、緊張していた。

そこまで無言で案内した睦美は、やはり無言で幸一を三人のそばに座らせると、部屋から出ていった。

残された幸一と他の三人は、会話を交わすこともな

く、ただ待っていた。

全員、どこか落ちつかない雰囲気だけは感じとれた。どうやら、納得して、ここに来ている者はいないようだった。

しばらくすると、法衣らしい白い服を着た牧師が現れ、祭壇に向かってひとしきり祈りを捧げると、幸一たちの方に向き直り、話し始めた。

「虚妄の世界に放り出され、自らの姿を見失った迷え

る子羊たち。主のお導きにより、ここに集うことができたあなた方は幸いです。あなた方はここで、主の定めた本来のあなた方として生まれ変わります。そして、真のアダムたちは誇りを取り戻し主の思し召しを広めるための先導者となり、真のイブたちはその卑しい肉欲を制しアダムを助けるべき良き伴侶となるのです。あなた方は選ばれた者たちです。選ばれた者としての自覚を持ち、この教会での修練を糧としてください。

アーメン」

牧師はその後、今夜、入信式とも言える「名付けの儀式」を執り行うので、それまでに身を浄めるように言った。

幸一が「身を浄める」とはどういうことなのかと思っ
ていると、いつの間に入ってきていたのか、男女四
人ずつ、計八人が、幸一たちのもとに近づいてきた。
男たちはカーキ色のジャケット姿。女たちは、襟の大

きな藤色のワンピースを着ている。

彼らの二人ずつが組になって幸一たちを案内する。

幸一ともう一人の男には、女が二人ずつ寄り添った。

幸一たち男が連れて行かれたのは、鏡張りの風呂場のような場所だった。浴槽と広い洗い場がある。浴場らしくないのは、鏡を張り巡らせた壁にキリスト像があることだった。

そこで女たちは、幸一たちに服を脱ぐように言った。

と同時に、女たちも服を脱ぎはじめ、なんのためらいもなくブラジャーとショーツだけの下着姿になった。

もう一人の男は、その成りゆきに驚いてたじろいでいるようだった。シチュエーションとしては、まるでソープランドだからだろう。

さらに、浴槽につからされた後、女たちが剃刀を持ち出し、体毛を剃ろうとした時には、男はひどく抵抗

した。

女たちは「主に近づき、真理を知るためには必要なことなのです」と、その妙に神経質そうな男をなだめ、作業にかかった。

幸一の方は、その間、なんの抵抗もせず、女たちに言われるままに従った。

幸一は腹をくくっていた。もうここまで来たら、なるようにしかならないのだ。

だいいち幸一は、その女たちの正体も薄々感づいている。里佳や、先刻の睦美の例から考えて、その女たちも、おそらく本当は男なのだ。

言ってみれば、ここの連中はみんな狂っているのだ。こんな連中を相手に暴れてみても仕方がない。それより、この狂気にとことんつきあって、狂気の実体を見極めてやろうと思っていた。

そして一方で、幸一の中に、ある種の期待があるの

も事実だった。

そして、その期待は、ほどなく実現した。

その「浄め」——というか、入浴が終わり、幸一がきれいに剃りあげられた自分の体を見ていると、女たちが、下着を取り出したのだ。それは、思ったとおり女物だった。

幸一ともう一人の男は、パッドを入れたブラジャー、

ショーツ、そしてスリッパを着けられ、さらにその上から女たちと同じデザインの藤色のワンピースを着せられた。

そのあと、女たちは、幸一たちの顔にメイクし、ロングヘアのウィッグをかぶせた。

鏡の前に立たされた幸一は、自分の姿に見入った。

期待以上の美人がそこにはいた。すね毛などがなくなつたぶん、この前の時よりきれいに見えた。

その作業を進めた、たぶんじつは男であるはずの四人の女たち——と言っても、彼女たちも美人ぞろいだ——より、ずっと女らしい気がした。

幸一が鏡の前にたたずんでいると、その女の一人が言った。

「さあ、名付けの式が始まります。これであなたは、ほんとうのあなたとして生まれ変わるのですよ」

「主よ、聖霊よ、そして御子よ。今日ここに、御名において、二人のアダムと二人のイブを、その真の姿に導くことができることをご祝福ください」

先刻の牧師が、祭壇に向かって祈りを捧げる。

幸一たち新入りの四人は、そのすぐ後ろに立たされていた。幸一ともう一人の男が女装しているのに対し、案の定、女二人は男装させられていた。驚いたのは、二人とも、長かった髪が刈り上げられていることだ。

女の場合の「身の浄め」は、どうやら髪を切ることにらしい。

礼拝席は、半分くらいが埋まっていた。みな、例のカーキ色のジャケットと藤色のワンピースという同じ服を着ている。たぶん、ここで「修練」とやらをつんでいる者たちだろう。

礼拝を終え、幸一たちの方に向き直った牧師は、まづこう言った。

「本来ならば名付けの式の司祭は、我がエデンの真理の偉大なる教祖、
有阿今朝雄様ありあけさおにおつとめいただくのですが、教祖様は現在、アメリカの教団設立のためご渡米中です。かわりに、私、導師染島が執り行います」

アリアケサオ：：妙な名だな。

女装しているせいで穏やかではいられないものの、一方で冷静にその場を観察していた幸一は思った。

「西原きよみ、前に出なさい」

染島と名乗った牧師——いや、導師というのかもしれない——が呼ぶと、幸一とともに並んだ男装の女が、びくびくした様子で前に出た。

「人の悪しき罪によりて誤りの衣をまといし子羊、きよみ。今、主の御名において、その衣を脱ぎ、真のアダムとして生まれたり。その名を君雄という」

朗々と響く声で導師染島は宣言した。そして、聖盃

に手を浸し、聖水をきよみの上にふりかけた。

もう一人、男装の女性が呼ばれ、同じことが繰り返された。

そして――

「荒井幸一、前に出なさい」

幸一の番が来た。

「人の悪しき罪によりて誤りの衣をまといし子羊、幸一。今、主の御名において、その衣を脱ぎ、真のイブ

として生まれたり。その名を美幸という」

——こうして、幸一の美幸としての日々は始まった。

6 異端の決裁

「偉大なる導き手、有阿今朝雄教祖様が聖書の中に読みとられた黙示、世界の真理の核心は、なにより、旧約聖書の創世記第一節から第三節、つまりエデンの園

の部分にあるのです」

おそらくは四十代半ばだろう。染島導師の朗々たる声が礼拝堂に響いた。それなりに低音ではあるのだが、時折、甲高い声音が混じるところをみると、どうやらこの男も、こここの他の連中と同様、正体は反対の性、つまり女なのだろう。

「前に学んだように、世界のはじめ、主は六日をついやし、森羅万象を創造されました。そして、その最高

の創造物である人、つまりアダムを、エデンの園に置かれた。さらに、その『ふさわしい助け手』として、アダムの肋骨からイブをお創りになったのでした。ここでまず、はっきりしていることがひとつあります。

イブはアダムの『助け手』であるということ、つまり、人間は、男が主導的なのであり、女はそれに従うものだということ。それが、主の、男と女に対する最初の思し召しだったわけです。これをよく覚えておい

てください」

幸一は、ここに来てから、これまで何度となく繰り返し聞かされたその言葉を、聖書に傍線を引きながら、聞いていた。それは、いかにも、その内容に感銘し、一言も聞き漏らすまいというそぶりだった。少なくとも、染島や、礼拝堂の席に座った十五人ほどの「修練生」——教団では、ここの信者たちをそう呼ぶ——たちからはそう見えただろう。

「次に、アダムとイブが楽園であるエデンの園を追放されるまでのくだりを思い出してください。その理由はなんだったでしょう。主は、アダムにこう仰せられました。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてもよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない』。それにもかかわらず、蛇にそそのかされたイブは、その木の実を取り、自らが食べると同時にアダムにも食べさせたのです。それに対して主は

お怒りになり、二人をエデンから追放されたというわけです。前に学んだように、一般には、その知識の木の実を食べたことが人間の原罪なのだと解釈されています。しかし、ここで、よく考えてみてください。大きな疑問がありませんか。それなら、主は、なぜ、エデンの園の中央に知識の木を置かれ、また、なぜ、ここに、それを食べることを促す蛇を配されたのかということです。蛇もまた、主の創造物であるわけですか

らね。たしかに主は、その実を『食べてはならない』と仰せられた。しかし、それなら、最初から、そのよ
うな木をお置きにならなければいいということになり
ます。我々の教主様は、この点に、大きな矛盾を見い
出されたわけです。そして、教主様は、そこに、聖書
解釈の大いなる錯誤を発見されたのです。その疑問に
対する教主様のお答えはこうです。主は、そもそも最
初から、その知識の実をアダムが食べることを期待し

ていたのではないか。そして、主は、『食べてはならない』と言うことで、万物の霊長たる人間の主体性を試されたのではないか、と」

そこまでを一気に語った染島は、そこで大きく息をついた。そして、語調を変え、つづけた。

「そもそも主は、人を、ご自身に『似るように』創られたのだと聖書は述べています。つまり、主と同様に、世界を創り出すものとして人間を創ったのです。それ

なら、その人間に必要なのは、自ら行動する力、つまり、主体性です。主は、人にそれを期待された。その点で、一般の『原罪』に関する聖書解釈は、根本からまちがっているのです。知識の実を食べたことが罪なのでは、けっしてない。しかし、そうだとすると次の疑問がわいてきます。それなら、人の本当の『原罪』とはなにか、つまり、主は、その期待どおり知識の実を食べた人に、なぜお怒りになり、エデンから追放さ

れたのかということ。ここで、私が最初に言ったことを思い出してください。主が、そのような主体性を期待したのは、誰にだったでしょう。なによりアダムに、つまり男にだったのです。にもかかわらず、知識の実を最初に食べたのは、主が『助け手』としてお創りになったイブだった。アダムは、イブの勧めに従って、その実を食べたにすぎません。本来、主がアダムに期待した行為をイブがし、イブに期待した行為を

アダムがした。主は、なにより、そのことにお怒りになつたのです」

たしかに面白い解釈だ、と幸一は思った。つまり、人間は、その当初から性を取り違えたというわけだ。

「お怒りになつた主は、人をエデンの園から追放された。しかし、慈悲深い主は、それで人をお見捨てになつたわけではありません。その後も、人に期待され、何度も人をお試しになつたのです。しかし、その期待

は、やはり、アダムに対して向けられていた。その結果、それ以降、多くのアダムたち、つまり主体性なく、自らの欲望に押し流されるだけの男たちによって裏切られつづけたのです。旧約の記述は、そんな、アダムによる主への裏切りの歴史に他なりません」

染島は言ったあと、修練生たちの顔を見渡した。幸一とともに「名づけの儀式」をした三人もその中にいる。面白いのは、真ん中の通路を挟む形で、男女――

と言つても、見かけは反対なのだが――が、完全に分かれて座っていることだ。

染島の目の動きにつられ、幸一は、思わず、通路を挟んだ席に目をやった。そして、あわてたように目をそらし、スカート裾を直す仕草をしていた。そこに座った男――もちろん本当は女だ――が、こちらを見ていた気がしたからだ。

そのあと幸一は、そんな行動を自然にとつた自分自

身に、内心、苦笑した。

この「エデンの真理修練教会」へ来て三ヶ月。異常な集団の中で生活しているうちに、自分自身の神経もおかしくなっているにちがいない。

今、幸一は、もっぱら、女装した男たちの中で暮らしていた。

男女が顔を合わせるのは、修練生たちの「レベル」

ごとに分けて行われているこの「聖書講義」と、朝夕の礼拝だけだ。男女とも同じ建物内にいるのに、日中は姿も見ないし、言葉を交わすこともない。ちがう場所に厳密に分かれて生活しているのだ。

教会の建物は五階建てだった。礼拝堂と教団事務所、調理場などのある最下層、つまり一階だけが大きな平屋ふうの造りになっていて、そこから山の斜面に沿って階段状に、横長の二階から五階までが重なっている。

幸一たち男——ここでは「女」として扱われる——は、二階に暮らしていた。女たち——同じく、ここでは「男」だ——は、三階以上にいるようだが、それ以上の階に行ったことのない幸一にはよくわからなかった。

二階は、三分の二以上が修練生たちの居室で、残りが食堂になっている。

居室は、廊下を挟んで二十室。五坪ほどの一部屋に、

三人ずつの修練生が暮らしていた。例えれば、どこかの企業の独身寮といった感じだ。いや、その生活の様子から言えば、女子寮という方がより適切かもしれない。

幸一があてがわれた部屋には、すでに美智子と昌代と呼ばれる「女」たちがいた。その二人が、勝手にわからない新入りの幸一の世話をあれこれやいてくれる。つまり、幸一が「女」として暮らせるよう、面倒

を見る——というか、指導する——役割なのだ。

どうやらそれがこのシステムらしく、他の部屋を
見ても、同室の三人の構成はだいたい決まっていた。

一人は入信後一年以上の者、もう一人は半年以上、そ
して残りの一人が新入りという組み合わせだ。幸一の
部屋でいえば、美智子が入信後一年二ヶ月、昌代が八
ヶ月ということだ。

そんな「女」の修練生たちの「レベル」のちがいは、

幸一にもすぐに見分けがついた。

早い話が、「修練」の長いメンバーほど女らしいのだ。物腰や言葉づかいなどもそうだが、そもそも体型がちがっていた。

同室の者は、毎日、一階にある共同浴場——最初の日、幸一たちが「浄め」をした場所だ——で、いっしょに入浴する。その時、幸一は、美智子と昌代の裸身を見ることになる。

美智子には、すでに立派な乳房があり、体つきも女だ。それに対し、昌代の乳房はまだ小さく、体の線もごつごつした感じなのだった。

ただし、二人とも、股間には、まだ男の証拠を残しているのだから、幸一には、気味のいいものではなかったが。

修練生たちは、その身体の変化を、修練による信仰心の強さの証しだと信じているようだ。

だが、幸一は、おそらく、食べ物かなにかにホルモ
ン剤が混入されている結果だろうと見ている。

食事は「男」たちの分も含め、幸一たち「女」が作
るのだが、調理が終わり、上の階の食堂へ配膳される
前に、染島ら「導師」が、他の者を排し、やはり「浄
め」と称する儀式をするのだ。たぶん、その時、「薬」
が入れられるのだろう。

もちろん、それがわかっていて食べるのは、幸一に

も抵抗があった。しかし、取材のためなら、その程度のことにはたじろがないのが、一匹狼のスキヤンダルライター、幸一の信条でもある。

以前、暴力団につながる覚醒剤密売組織をスクープした時など、自ら覚醒剤を打ち、中毒の売人に成りすまして、組織に潜入したことすらあった。

（あの時だって、その後一ヶ月ほどで、シヤブ中を克服したのだ。女性ホルモンごとときで死ぬようなことも

ないだろうし、もとに戻れないわけでもないだろう。)
幸一は、そう考えて、毎日の食事を残さず食べていた。

と、それはともかく、幸一たち「女」の日課は、そんな炊事や清掃、「男」も含めたメンバー全員の衣服の洗濯といった「家事」に類することが中心だった。

まるでそれが、「女」の本分だとも言わんばかりの「修練」である。

「女」たちが、そんな仕事に精を出している間、「男」たちが何をしているのかは、まったく見ていないので、今のところよくはわからない。

「美幸さん、あなたって、ほんとにえらいわね。そんなふうに、毎日の講義を自分で再学習することが、修練生にとっていちばん大事なことよ」

後ろから不意に声をかけられ、自分のメイキャップ

テーブルに向かっていた幸一は、びっくりとしてノートを閉じ、振り向いた。

「あ、美智子お姉さま。驚いたわ」

書くことに没頭していて、部屋に美智子と昌代が入ってきたのに気づかなかつたのだ。それで、一瞬、じつは取材ノートであるそのノートの中身を、二人に見られたのではないかと動揺した幸一だったが、すぐに女らしい仕草で受け答えたことで、二人は何の疑いも

持たなかつたようだ。

ちなみに「お姉さま」というのは、先輩修練生に対する呼び名だ。ここにいる「女」たちは、すべて姉妹というわけである。

「あなたがそれだけ一生懸命だから、主はどんどんあなたをきれいにしてくださるのよ。お化粧も、本当に上手になったし」

「ううん、昌代お姉さまには、かなわないわ」

昌代の言葉に、幸一は、メイキャップテーブルに向き直り、肩のあたりまで伸びてきた自分の髪にさわりながら、教えられたとおりの「女」らしい仕草で、そう答えた。

鏡の中には、そろいの藤色のワンピースを着た、まるで本当の姉妹のような、三人の美女たちがいた。

この部屋には、作りつけのベッドとクローゼット以外、余分なものは何もなかったが、メイキャップテ-

ブルだけは、一人に一脚ずつ置かれている。

例の炊事とか洗濯とかの仕事以外の時間を、「女」たちは、ほとんどこのメーキャップテーブルの前で過ごすのだ。

もちろん、聖書と教義の「自習」もここでするのだが、メイクしたり、髪をとかしたりといったことに使う時間の方が長かった。

身繕グルーミングいは、「女」が真の姿を取り戻すために必要

なこととして、推奨されていた。美しくなることこそが、「女」にとって、修練の成果であり、神の祝福であると言われているのだ。

「美幸は、肌だってすべすべだし、体の方ももう変わってきてるみたいだし、あたしも安心してここを離れられるわ」

美智子は、幸一の両肩に手をかけ、どこか感慨深げに言った。

「え、美智子お姉さま、それじゃあ……」

幸一が、鏡越しに美智子の顔を見上げると、美智子より先に昌代が、興奮した面もちで答えた。

「そう、布教者になるのよ。導師様のお許しが出たの」
「まあ、お姉さま、おめでとうございます」

「女として外の世界に出るのはちよつと恐いけど、世の中に真理を広めるために、あたしにできることは精いっぱいやるつもり」

美智子は、鏡の中の自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

美智子はここでの一年以上におよぶ修練を終え、いよいよ布教活動に入るのだ。

エデンの真理教は、世の中にその存在を公表してはいないわけだから、実際は、あの宮内里佳のように、

「自己開発セミナー

スピリチュアル・リポーン・アソシエーション

S

R

A

」のアシ

スタントトレーナーになるということである。そして、

「できることは精いっぱいやる」という美智子の言葉の意味は、里佳がそうしたように、必要なら、「真理」のために男と寝ることもあるということだろう。

「男」の「助け手」である「女」にできることは、けつきよくはそれだけだというのが、「真理」の教えなのだから。

「エデンの真理」の教義がどんなものか。染島の「講

義」のつづきに沿ってまとめると、こういうことになる。

「慈悲深い主は、エデンでのアダムの裏切りにもかかわらず、それからも男アダムに期待しつづけた。ノアに、アブラハムに、そしてモーゼに。しかし、そのたびに、けつきよくはそれ以後のアダムたちによつて、その期待を裏切られた」

染島は、旧約聖書をそんなふうに読み変えた。

そして、新約になると、その解釈は、さらに大胆なものになった。

「ある時、主は、たび重なるアダムの裏切り、エデンの園で自らが重大な錯誤を犯したのではないかと考えた。アダムの肋骨からイブを創った時、つまり、人を二つの相反する要素に分けた時、アダム、つまり男として期待したものがイブに受け継がれ、イブ、つまり女に期待した要素がアダムに残ったのではないか。

それなら、イブが先に（主体性を持って）知識の実を
 食べたことにも納得がいく。じつは、イブこそが真の
 男、^{アダム}アダムこそが真の女^{イブ}なのではないか。そう考え
 た主は、今度は、男ではなく、一人の女を選んで啓示
 を与えた。『お前の真の姿、^{アダム}男となり、^{キリスト}救世主とな
 れ』と。その女こそ、誰であろう、ナザレのマリアだっ
 た」

つまり、イエス・キリストの母と言われるマリアこ

それが、実はイエスその人だったというのだ。

「マリアが、主と聖霊により、処女のままイエスを身ごもったというのは、じつは、そういう意味なのです」と染島は言った。たしかにマリアはイエスなら、処女のまま、イエスを生んだと言っても不都合はないだろう。

「マリアは、主の言葉に従い、男装した。そして、イエスとなったマリアは、主の期待に応え、ユダヤの地

に主の教えを伝え広めることに成功した。それを見て主は、自らの錯誤を確信した。ところが、世界はすでに、男、つまり、本来はイブであるものたちによつて支配されていた。そのものたちのねたみと恐れのために、イエスは架刑に処せられ、その教えはねじ曲げつづけられた。人の世に戦いがつづき、救いが訪れないのは、主体性なく、肉欲と嫉妬心のみ身に身をゆだねる真のイブ、つまり、まちがって男と呼ばれる者たちによつて

支配され続けているからだ」

そして、それを見た主は、もう一度、救世主を地上に送ることを考えたのだという。

「それが、偉大なる我が教主、有阿今朝雄様なのです」
有阿は、肉体上は女として生を受けた。しかし、ある時、主の啓示を受け、マリアと同様に男装する。

「今度こそ、主は、自らのエデンでの錯誤を含め、教主様にすべての真理をお告げになったのです。今こそ、

すべての男と女がその真の姿を取り戻し、真のアダムは世に主の教えを広めることに努め、真のイブはその体をアダムの前に差し出し、よき助け手となるように、
と」

ばかばかしくはあってもそれなりに筋は通っている
その「教義」を、異様な生活の中で、修練生たちはい
っしか受け入れていってしまおう。

そして、幸一も、表面上はその一人として振る舞っていた。それどころか、教義をよく理解した模範的な修練生として、日常生活は女になりきっているのだ。

しかし、もちろんそれは、取材のためのカムフラージュである。教団幹部は、幸一がスキャンダルライターであることを知っている。幸一が不審な行動に出れば、すぐに気づかれるだろう。まだ、うかつなことはできなかつた。

だから、今のところ、その教義を信じ切ったふりをして、ひそかにノートに知り得たことを書き留めているのだ。

幸一のねらいは、なにより、教主の有阿今朝雄だ。

アメリカでの教団設立のため、ずっと渡米中であるという有阿の正体を見極めるまでは、こうしてがんばるしかないと思っっているのだ。

しかし、最近、時として、その決心があいまいなに

なりかけるのも事実だった。

毎日、鏡の前で化粧し美しく変わっていく自分を見ていると、妙に心が落ちつく。薄汚い世の中に対する反感と、野心だけで生きてきたこれまでの人生を、すべて忘れられる気がする。そのことが、救いのように感じられるのだ。

染島の言うように、これが、本来の自分の姿なのではないかとさえ思えてくるのだ。

以前、里佳が言っていたように、ここに来る前から、幸一には多少そんなきらいがあったのだから、このままいけば、幸一も、いつのまにか、エデンの真理に取り込まれていたかもしれない。

しかし、そんなふうに傾きかけていく幸一の心を、ここに来た本来の目的に引き戻す事件があったのは、それから一ヶ月後だった。

そのきっかけは、美智子たち上級修練生たちが「卒業」し、また新しい修練生たちが入ってきたことからだった。そのことで、「女」たちが引き受けている毎日の仕事の分担が変わった。

幸一は、これまで洗濯が持ち場だったのだが、新たに、教団事務所の担当になったのだ。

十坪ほどの事務所を清掃し、各地のSRA本部などとの連絡のための郵便物を整理し、時にはデスクに花

を生けたりするわけだ。

昌子に言わせると、それは、修練生の中でもっとも優秀な「女」に割り当てられる仕事だという。

その日、幸一が事務所の掃除をしていると、めずらしく一人きりになった。ふだんはそこで数人の導師たちが事務を執っているのだが、その時は、染島は礼拝堂で例の「聖書講義」をしていたし、他の導師たちは食料の買い出しや外部との連絡のために出かけてい

た。

幸一はちよつと迷ったが、デスクの上の、前から目をつけていたものにとりついた。そこに一台だけ置かれたコンピュータである。

数日前、導師の一人が使っているのをそつと盗み見たところでは、それには、信者たちの基礎データが入っているらしかった。

おそらく、それを見れば、教団の組織と現勢がわか

るはずだ。

スイッチを入れると、中味はやはりデータベースだった。それほど複雑なソフトではないらしく、操作方法はさほどむずかしくはないようだ。

勘を頼りに操作してみると、データは、やはり名簿で、どうやら、S R Aの会員も含め、ひとりひとりについての本籍や現住所、それに信者としてのレベルらしきものが入力されていた。

S R Aの段階でとどまっているか、それともエデンの真理の信者になっているかは、「戸籍名」以外に「洗礼名」——幸一が「美幸」であるような反対の性の名だ——があるかどうかでわかった。

名簿は全体で一万人ほど、そのうち信者はまだ三百人ほどだった。その中には桜井睦美、宮内里佳——本名は、「陸夫^{りくお}」というらしい——、そして美智子や昌代——同じく本名は「道彦」「昌次」だ——もあつ

た。

幸一は気になって、自殺した宮原の名を検索した。

と、そこには「脱会・逃亡のため抹消」と記されていた。

見るまでもないと思ったが、ついでに自分の名「荒井幸一」も調べてみた。

そして、そこで、幸一は愕然とした。自分の名があったことにではなく、その下に思わぬ名前を見つけた

からだ。

「荒井冴子」——それは、なんと、妻の名だった。

三年前から姿を消していた冴子が、エデンの真理の信者だったとは……。

幸一は、ディスプレイ上のその名を食い入るように見つめた。そして、次に、その横の記載欄を見た。

「指示により抹消」。

名簿から「抹消」されているということ……、宮

原の例から考えても……。幸一の顔つきが変わった。

幸一はそこで、ある決心をしたのだ。

一週間後の早朝、エデンの真理修練教会にいる信者たちは、皆、思わぬ騒ぎで目を覚ました。

一階の入口で、十数人の人間が、導師たちと大声で押し問答しているのだ。それらの人間は、ひと目で、テレビのワイドショーのレポーターやカメラマンだと

わかった。

その騒ぎは、その日一日中つづき、新聞や雑誌の記者らしき人間も含め、館の外に押し掛けた人数は、ついに百人以上にもふくれあがった。力づくで入って来ようとする人々を、全員で押し止めるのがやっとだった。

毎日行っている礼拝をも中止し、ただおたおたとする館内の人間の中で、幸一だけが、起こっていること

のすべてを理解していた。

そして、夜になり、その日のところはなんとか一段落した頃、幸一は、染島に上の階に来るように言われた。

三階以上に上がるのは初めてだった。幸一は、階段を昇りながら、そこを観察した。

三階は、二階とほぼ同じ造りだった。おそらく「男」

たちの居室なのだろう。

そして四階は、全フロアがスポーツジムのような造りだった。壁際にはウエイトトレーニングの器具や、パンチングボールなどが並べられている。「女」たちが日々の「家事」をしている間、「男」たちは、おそらくここで、体を鍛えているのだろう。

「ここに来て、少しは変わったのだと思っていたのですが、あなたはけつきよく、悪魔に身を売っていたの

ですわね」

スポーツウエア姿で険しい顔をした「男」たちがまわりを取り囲む、マット敷きのフロアの真ん中に連れこむと、染島は、幸一にそう言った。

「なんのことでしょう？」

幸一は、まだ女らしい仕草で、とぼけてみせた。

「馬鹿野郎！」

とたん、「男」の一人が我慢ならないというふう

罵倒した。桜井睦美——今は「睦夫」というのだろう——だった。

「こんなことをしたのが、お前だってことは、もうわかってるんだぞ」

睦美はそう言って、幸一に何かを投げつけた。幸一の顔に当たり、床に落ちたそれは、写真週刊誌「リベレーション」の最新号だった。

幸一は、事務所のコンピュータに妻、冴子の名を見つけた翌日、書きためた取材ノートと、半年間、ひそかに隠し持っていた小型カメラで撮ったフィルムを、封書にし、事務所の外部向け郵便物の中に紛れ込ませたのだ。

宛先はもちろん、「リベレーション」誌編集部だった。この騒ぎは、まちがいなく、幸一の本稿が今日発売の「リベレーション」に載ったからだだった。

「ふふふ……」

雑誌をぶつけられ、しばらく顔を伏せていた幸一は、小さな声で笑い出した。そして、おもむろに顔を上げると、言い放った。

「これでもう、こんな茶番はおしまいだ。あんたらの教団と教主様とやらもな。で、あんたらは俺をどうするつもりだ」

幸一を取り囲んだ「男」たちは、二十数人いたが、幸一は、平然と言った。このまま、ただでここを出ていくことはできないだろうが、なんと行って、連中は、じつは女たちなのだ。かつては、危険な取材で暴力団などともやり合ってきた幸一に、かなわぬ相手ではないだろう。

「け、女が！」

彼らの中でもっとも屈強そうな体軀をした「男」が

言った。

「魔女め！」

そう言ったのは、睦美だった。

「魔女には、それなりの裁き方があるんだ。染島導師、いいでしょ？」

睦美が顔を向けると、染島は「うむ」とうなずき、一歩退いた。

睦美は、幸一につかつかつかと歩み寄ると、いきなり身

構え、そして、腕を伸ばした。そのパンチが予想外に速かったせいで、幸一はよけそこなつて、あごを強打されていた。

しかし、ひるむまもなく、今度は、幸一のパンチが睦美の顔面に炸裂した。……と思ったのだが、なんと、その腕は睦美の手に軽々とつかまれ、ひねりあげられていた。

「え……？」

幸一の顔に、意外そうな表情が浮かんだ。それだけで、もう身動きがとれなくなっただのだ。

「う……」

さらにひねってくる睦美の力に、腕がきりきりと音を立てるように痛み、幸一は顔をゆがめた。

そんな幸一の顔を見ていた睦美は、にやりと笑うと、幸一が着ていたワンピースの襟にもう一方の手をかけた。

(∴∴∴ 恐い)

幸一は、これまでの人生で感じたことのないような恐怖を感じていた。それは、本能的とでもいうような、体の奥底から震えあがるような恐さだった。

睦美の手が襟を引っ張ると、幸一のワンピースは、前の部分が、まるではがれるとでもいうように引き裂かれた。

そこから、幸一の着ているスリップが見えていた。

幸一は、思わず体を折り曲げ、それを隠すような仕草をした。

睦美が、さらに腕をねじった。そのせいで、幸一は、マットの上に仰向けに倒れてしまった。

その上に、睦美が覆い被さってきた。

幸一は、必死にもがいたが、逃れることができない。それだけ、睦美が鍛えているということでもあり、自分の筋肉が萎えているということでもあった。

睦美は、ワンピースの破れ目を引き広げると、なんと、レースのスリップの幸一の胸に手をかけてきた。小さいながらも膨らんでいる幸一の胸は、その手の中にはつきりとつかまれた。

「あ……っ」

幸一の体に、電流のようなものが走った。

「ふふ、感じてるのか？ まったく、女は、これだからな……」

睦美は、まわりに聞かせるだけでもいうように、大声でそう言った。周囲を囲んだ「男」たちが笑った。

幸一は、無性に恥ずかしかった。

両手を力ずくで押さえつけ、首筋に唇を這わせはじめた睦美に、幸一は、小さな声で言っていた。

「……やめて、……おねがい」

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

エデン・リベレーション

Eden Revelation

<公開版>

CopyRight 1993 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500